
東方働楽録

辻虎

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方働楽録

【Nコード】

N3915X

【作者名】

辻虎

【あらすじ】

アルバイターである若津皆人は
現代日本で生き抜くため、アルバイターを辞め社会人になる事を決意した。

そして第一歩としてとある会社履歴書を送ったのだが……
オリ主、幻想入りです

01 - アルバイターの朝

鞆に大量の新聞紙を詰め、地を蹴り、冬の早朝を駆けている男が居た。

白い息、先日降った雪は道の端に集められ、一〇 以下だと言うのにマフラーも手袋も着けず、薄着な格好とボロボロの靴で男は駆けていた。

決められたルートを通り、尚且つ氷や雪に足を取られない様に男は寒い中、走り続けていた。

男の住むアパートはボロボロだった。

風呂はあるものの、一人が限界の狭い風呂。

木造の床はギシギシと悲鳴を上げ、何時天井が落ちてきてもおかしくないほどのボロボロアパートだった。

「ただいまぁ」

男は一人暮らし、親戚、家族、兄弟も居ない、勿論彼女も居ない、生まれた頃から一人つきりだった。

中学に孤児院を抜け出し、一人必死に生きる為に始めた新聞配達も既に五年目、今年で歳に十九歳なる。

そんな男の家に見ず知らずの女性が居た。

「……………どちら様で？」

「いきなり無愛想な挨拶ね、わかつみなと若津皆人さん」

「何で俺の名前を？」

彼女は懐から出した紙をヒラヒラと皆斗に見せつける。

何処がで覚えのある紙に皆人は眼を細め凝視した。

「俺の履歴書！」

履歴書、アルバイトだけでは生きて行けないと感じていたので一週間ほど前に出した物だった。

初めて書いた履歴書、不愛想な顔写真が貼っており、字も多少汚い。

「って事は……………」

「ボーダー商事社長の八雲紫です」

「すみません、こんなボロ屋で」

「いいえ、こちらこそ勝手に邪魔したし」

「あの、粗茶ですが」

紫の前にお客様用の少し高めの緑茶を出す、と言ってもコンビニや自販機で売っているペットボトルの物と同じである。

彼の家では最低、茶葉は七回ほど繰り返し使うので、カフェインが少なく寝る前には意外に好評である。

「大丈夫よ、私は七十三使い古した茶葉のお茶を飲んだ事が在るわ」

「二桁で五十越えって……………」

「金銭的な事には五月蠅いのよ」

「そうですか」

自分もボロボロの卓袱台の前へと座る。

コホンと咳を一つした紫は懷から出した扇子を広げ、口元を隠すと皆人に聞こえる音量で呟いた。

「合格」

「えっ？」

「採用とでも言いましょうか？　ボーダー商事社員として貴方を向かい入れます」

「……………」

持った湯飲みのお茶を飲まず、皆人は硬直していた。

「あらっ、不満かしら？」

「い、いえ！　とても喜ばしいのですが、面接とか試験とかそういうのは？」

「面倒くさい」

「え」

拍子抜け、今から面接でも始まるのかと構えていた皆人は胸を撫で下ろし、肩の力が抜けていく。

「ただし、条件があるわ」

「はい？」

「貴方が私達の世界でまともに生きて行けるのなら採用、無理なら諦めて貰うわ」

「いや、あの試験が無いつて言ったのは？」

「今思いついたのよ、如何する？ 特に取り柄も無く、この平穩過ぎるこの世界に納得する？」

「……………」

折角の申し出、態々こんなボロ屋まで、社長自身が出向いてくれたのに断る事など出来なかった。

「分かりました、入社試験受けます」

「……………真っ直ぐな眼ね、それじゃあ三ヶ月後に」

紫が指を鳴らす。

その瞬間、何も無かった視界の先に切れ目の様な物が生じる。

切れ目はどんどん大きくなり、人一人が余裕に入れる位に拡大した。

「それでは、行きましようか。貴方は今日外界からの縁を切り、忘れられた者とされるわ」

「ちよっ、アンタ人間か！？」

「あら、ごめんなさい。私は人間ではなく」

後退りの態勢を取っていた皆斗だが、自分の足元にも紫の入ろうとしているソレが在る事に気付く。

「妖怪よ」

重力に逆らえぬ人間は下に落ちるだけ、足掻いても下へ、暴れても下へ、謎の空間を数秒間落下していると視界に見た事も無い光景が広がる。

「何処だよここ」

自分が落ちる事さえも忘れ、現代の日本から想像もできぬ緑豊かな世界が皆人の心を奪ったのだ。

風を切る音が耳を支配し、他に何も聞こえない中、何故か耳に紫の音が聞こえてきた。

「ようこそ、幻想郷へ」

01 - アルバイターの朝（後書き）

主「初めての方、『家出男シリーズ』で面識のある方、どうも辻虎です。

今回は新作となっており、妖怪の山が中心です。

出ないキャラクターもたくさん出ますが、それでも温かい目で見守ってくれたら幸いです」

02 ニアルバイター川流れ（前書き）

初めて自分の作品を見てくださる方へ、

この作品の投稿は毎週月曜、木曜、土曜となっています。

偶に体調が悪くなり、休載するかもしれませんが、

2828パルパルしていただければ光栄です。

すまない……………今回も自重できない！

02 - アルバイター川流れ

「冷えますね」

「そりゃ、既に十二月だからね」

妖怪の山の山道、川沿いの道を行く二人の姿があった。

白銀の白い髪を風に靡かせ、マフラーと手袋でしっかりと防寒武装した白狼天狗、犬走椀と、防寒具も着けず、寒さなど感じていない河童の河城にとりであった。

「にとりは冬眠とかしないんですか？」

「今年の私は発明年越しでもしよかなって、一年中暖かい空気が私を包む様に『温かくなーるベルト』を……………およ？」

にとりは足を止め、川に流れる何かを見つめていた。

「如何した？」

「うーん、何か変なのが流れてるよ」

川には何故か親指を立てた右手の様な物が流れていた。

「アレじゃないですか？ あのアストシーンに溶鉱炉に入って行く、体が機械の……………」

「あー、たぶんそれだと思っけど、何か違和感が……………」

流れて行く腕の近くで空気の泡がプクプクと上がって行く。

「生きてますにとり、救助を！」

「オーケー、『のびーるアーム』行けえ！」

「ダイハードは1と2が面白……………い？」

目を覚ました直後、港の視界には白髪と青髪の現代から考えればありえない髪の色少女が目の前に立っていた。

「アレ？ マクレーンは？」

「おっ、起きた？ 盟友」

「め、盟友？」

「あ、眼が覚めましたか？」

後ろを向いていた白髪の少女がこちらを振り返る。

「何故こんな季節に川で溺れていたんですか？」

「やっぱね、4はCGに頼り過ぎなわけですよ、それに比べたら1と2は最高、あの人本当に毎年が厄年だなって……………ああ、えつと、その」

率直に言うと言えいいのか分からない。

翌々現状を確認すると白髪の少女はスタイルも良く、胸も手に収まるほどで犬耳と尻尾の生えたファンタジーの塊、小型の機械をドライバーで弄る青髪ツインテールの少女、大きい胸が視界に入る、普通の人だったら『何これ何処の喫茶店？』と言いたい。

「えつと……………」

「ん？ 自己紹介がまだだったね、私は河城にとり、この工房で色々作ってるよ、今は八十八？高射砲とか作ってるけど、見る？」

アハト・アハト、現代ではこの名前の方が認知度は高い。

明らかに人間一人が作れるものではない、ましてや小柄な少女がこんな物を作れるとも思わない。

「私は犬走桜、この山一帯の警護をしています」

「犬？ パシリ？ もみもみ？」

「斬りますよ？」

「すいません調子乗りました」

「俺の名前は若津皆人、外の世界から来たただのアルバイトだ」

「あるばいたー？」

にとりは機械を弄りながら興味あり気に声を漏らす。

「決まった職に就かないで、色々な経験と知識を得る職業、まあ今は少し違うけど、今はボーダー商事に入れるかどうかの試験中なんだ」

「ボーダー……………ああ、スキマ妖怪の」

「解ってくれたか？」

「まあ、八雲紫が絡んでいるのなら大体は理解できます、でも何故川で？」

「上空三百メートルから滝つぼへダイブしました」

「大変だったんだね」

にとりがポンと肩に手を置く。

「はい」

「助けてくれた事は感謝してる、ありがとう、悪いんだけどさ宿屋とか無い？」

「人間の里にならありますが、今から行くと昼辺りには辿り着けま
す」

「まあ、妖怪に襲われなかったらね」

「妖怪？」

にとりは弄っている機械から手を放し椀の尻尾を掴んだ。

「ひゃう！」

「こついの」

尻尾に頬ずりしたり、顔を埋めたりするにとり、椀は何か物凄く
気持ちの良い表情をしていた。

「ああ、らめえ、そ、そこは感じるか、ら！ ああ、に、にひより、
やめ……………」

「うりうりうり、ここか？ ここが気持ち良いんだろう！」

「……………」

皆人は眼を瞑り、その場で座禅を組む。

意識を集中させ、他の事が考えられぬように瞑想を開始した。

「よし、許可が下りたぜ！ うりうりうりうりうりいいいいいい！」

「ひゃ、らめえ、イクウ！ イッチャウウウウウウウウウ！」

「中々の弄りっぷりだね」

「おや？ 君も弄りの経験者？」

「バイトでは色んな人と出会いますからね、多少の弄りは出来ますよ」

「弄り談義で盛り上がりたないでください！」

前屈みになり、尻尾を押さえている椀が涙を流しながら抗議の声を上げる。

「少しやり過ぎたんじゃないですか？」

「まあ、良いんじゃない？」

「……………ですね」

キシャーと猫の様な威嚇をし、こちらを睨みつける椀、皆人は宥める様に椀の下顎をゴロゴロしてやる。

すると次第に気分が落ち着き始め、犬が喜んでいる様に尻尾をパタパタと左右に揺らしていた。

「自分は何すれば良いですか？」

「ん？ そうだなあ、文の所でも連れて行ってあげたら？ 椀」

02 - アルバイター川流れ（後書き）

主「ダイハード四週連続とかマジキタコレ！ 海外の映画好きなんですよねえ」

特にアクション物とか」

皆「働かないとホームアローンのDVD割りますよ？」

03 - アルバイターの職

妖怪の山、柊をお供に、にとりの工房からさらに上へと登り道中。
「『文々。新聞』……………中々本格的な新聞だな、俺は学級新聞程度だと思つてたんだが」

「絶対にあの人の前では言わない方が良いでしょう」

新聞を広げ、険しい山道を歩く、皆人は足場も確認せずに足を進めるので数回転げ落ちていた。

「まあ、ここまで出来が良ければ十分でしょ、たった一人でここまで書けてるなら」

「まあ、私が手伝われる事が度々ありますが」

柊の愚痴や、皆人の居た現代の話をしながらも足を進め、半時間ほど経った頃に目的地である家に着いた。

「ウッドハウス……………中々豪華な家をお持ちの事で」

木の上にある家、木には何表札の様に『射命丸文』と彫っていた。
「ハシゴとか無いので、私に捕まって……………」

皆人は柊の言葉に耳を貸さず、アクロバットな動きにとりの工房から拝借したワイヤーを使い、木をいとも簡単に登り切った。

「人間ですか？」

「人間ですが？」

「失礼します」

柊を先頭にし、文の家へと入って行く。いきなり知らぬ顔の男が入ってきたら驚くだろうからである。

部屋の中は至って綺麗だが、壁に写真が万遍無く貼られている。

刑事ドラマに出てくる、バツ印がされている写真や、中には生着替え、スカートの中の神域写真もある。

「ですからして！ 私も一人の乙女であるわけで男性と同衾するの

は些か無理があります！」

「異性を意識していいのは若い娘だけよ、私みたいな十七歳の……

……」

「貴方だけでは言われたくありませんし、てか堂々と年齢詐称しないでください！」

部屋の奥で聞こえてくる二人の声、一方の怒鳴り声には覚えが無いが、片方の声には聞き覚えがあった。

「私はもう冬眠したいの、悪いけど後はよろしく」

「あ、ちよっと！ はあ………どうぞ」

不機嫌な声に呼ばれ、椀と皆人は部屋の奥へと進んで行った。

「ど、どうも」

頭を軽く下げ、部屋へと入る椀を先頭に俺は怒鳴り声の主の顔を見た。

第一印象は『鴉っぽい』だ。

背中から鴉より大きく黒い翼、得物を狙う鷹の様な鋭い眼光、綺麗だと言葉も出てきたが、初対面の相手にいきなり言う事ではないので口を噤む。

「貴方が皆人さんですか、私は射命丸文と言います、お話は聞きましたよ」

彼女は誰かと言わなかったが皆人は誰か理解できていた、紫であると確信に近い物を持っていた。

「貴方は私の家で居候する事になりました」

「え？」

「そう言う事なのでよろしくお願いします」

彼女はそう言うと、家を出て、自前の翼で飛んで行ってしまった。

「はあ、困りまったわ」

素性が解らない今、あの皆人と言う人間には優しく接するのは危険であった。

これは素性や人柄が解らないからではなく、一つ屋根の下、知り合ったばかりの男女二人で暮らしていく事は女性にとっては怖い事だ。

相手は人間、実力行使すれば追い出す事など容易い、だがスキマ妖怪に弱みを握られている今、そんな事すれば確実に『伝統ブン屋』の危機である。

「まあ、様子見として一週間、それで何かしたら文句を良い付ければ良い話、ちよつとだけ辛抱よ」

彼女は呟き空を舞っていた。

「んで？ 紫さん、見てるんでしょ？」

「バレた？」

「バレてますよ」

スキマから上半身を出し、現れた紫、手に袋の様な物を持っていた。

「手荒い歓迎でしたね、真冬の川落とすなんて」

「仕方がないじゃない、だって眠かったんだし」

「はあ、貴方のやりたい事がイマイチ掴めないんですが……」

「掴ませない様にしてるからよ」

何を言っても無駄だった、まるで初めから皆人の言う言葉を知って対策を立てている様な、何が飛んできても対応できるプロだ。

「でも如何して射命丸さんの協力を受け入れて貰ったんですか？」

「簡単よ、ちよつとお願ひしたら簡単に引き受けてくれたわ」

嘘だと簡単に分かった、彼女のポーカーフェイスの裏に何か黒い邪気の様な物を感じる。

脅迫の他に何もないだろう。

「ねえ、貴方は元の世界に帰りたい？」

「まだ来て五時間ほどですか………まあ、帰りたくは無いですね」

「何故かしら」

「ここは綺麗な所です、その反面、現代では有り得られない恐怖や

冒険が待ってます。あんな腐った世界よりはマシですよ」

ゴミを見つめる様な蔑んだ目で天井を見つめる、その眼は怒りで満ち溢れている様な、恐怖に苦しんでいる様な眼をしていた。

「自分の居た世界を侮辱出来るとは……………何かあるのかしら？」

「『ある』と言うよりは『あった』ですかね、男の過去は検索しない方が身の為ですよ」

「火傷でもするのかしら？」

相変わらずの無表情、だが紫の何かを知ろうとしている事を皆人は感じていた。

皆人は今できる最大の作り笑いをし、小声で呟く。

「さあ？」

03 - アルバイターの職（後書き）

主「俺も幻想入りしたいなあ」
皆「変なフラグ建てるな」

04 - アルバイターに出来る事

アルバイトの基本は色々である。

接客業なら『笑顔』『手際』『キヤラ』が大切である。

裏方業なら『技術』『技量』『手際』内容にもよるが、技が必要なのは理解して貰えただろう。

場所、時間、内容の全てを理解し、自分がすべき事をいち早く見つけ、行動する。アルバイト共通の初歩である。

「と言つても……………」

文の家は綺麗であつた、写真や資料が散らかっている所は触らないのが鉄則、容易に動かし、相手の気を損ねたい為である。

「料理は作るとして、材料が無いな」

昭和辺りに導入された昔ながらの冷蔵庫の中にはそれほど材料も無く、元氣ドリンクらしき物、賞味期限の切れた野菜が散乱していただけだつた。

「買い出しでも行くか」

外界の通貨はこの世界では売れるらしい、紫に頼んで貯金全額を下ろして貰つたが、大して多くはない、ゲーム機が三つ買える程度だ。

数年間頑張つて貯めた貯金がこれだけなのは理由があつた。

育ててくれた孤児園への寄付である、出て行つたとは言え育ててくれた親の様な物だったのでバイト代の半分は寄付をしていた。

「そのお蔭で生活はカツカツだつたんだよなあ」

「そうだつたんですか」

椋に頼み、山を降り、香霖堂へと買い物へ来た。

香霖堂、リサイクルショップとでも言えば良いのか、武器や雑貨、レトロゲームや今は忘れ去られた過去の栄光の皆さんがずらりと並

んでいた。

「待たせたね」

店主である森近霖之助が奥の部屋から出て来る。

「まあ、君は外来人だし、多少多く見積もつといたよ」

野口、樋口、福沢の三現神……………基三現金にお別れを告げ、売り払ったのだ。

「ありがとうございます、あの……………少しいですか？」

「何だい？」

香霖堂でお世話になり腰に黒い小包を下げ、里へと来た。

「何を購入したんですか？」

「ん？ ああ、まあ物騒らしいから護身用の為に武器の一つでも、これでも喧嘩は強かったんだぞ」

「そうですね、まあ、私が居る限りは危険な事にはならないと思いますよ」

「そうだと祈るよ」

里は賑やかだった、時代背景がごちゃ混ぜになっており、頭が混乱しそうだった。

現代風の服を着ている店があれば、和服に身を包む店もあり、現代からは遠く掛け離れていた。

「とりあえず買物でもしますか」

「そうですね、文さんは大抵何でも食べますが……………」

「すいません、鳥肉ありつたください」

皆人は椀の小柄で可愛い拳骨をお見舞いする事になった。

04 - アルバイターに出来る事（後書き）

主「急いで投稿したから文に切れがないな……………」
皆「頑張れ」

主「もうちょい励ましの言葉何とかならないか？」

05 - アルバイターの和解

「はあ、如何でしょうかあの人間」

夕暮れ、朱色の空を自前の黒い翼で舞う文は皆人の事で頭を悩ませていた。

一人で勝手に飛び出し、皆人の件を放っておいて新聞のネタを探しまわっていた。

「まったく、厄介な相手に眼をつけられたわ」

ポケットから取り出した写真には紫、神奈子、永琳、聖、幽々子の密会写真。

これが今回の件の発端であった、この写真を使い『文々。新聞』の購読者を増やす事が目的だったが、何処から情報が漏れたのか、これを紫が『幻想郷五大老の密会』とかなんとか難癖を付け、皆人を押しつけたのだ。

「まあ、あのスキマ妖怪が進めるのなら問題は無いし、椛もわんこの勘とかで警戒していなかった……………一週間ほど様子見ね」

「……………」

自宅に着いた文だった。が家の前で息を殺し、そつと中を覗いていた。

「料理上手ですね」

「数年も一人暮らしだったからな、お袋の味ぐらいだったらちよつとは再現出来るぞ、『肉じゃが』『煮つ転がし』『野菜炒め』『ポトフ』、一番得意なのは『目玉焼き』」

「そこまで出来れば十分だと思いますが」

椛と皆人が台所に立ち、料理を作っていた。

まるで新婚の夫婦みたいな雰囲気醸し出しているので腹立たしい。

「いやあ、何故か食事中に涙を流れましたよ」

「何故でしょうか、懐かしい味に涙が流れました、玉ねぎとか入れてませんよね」

「玉ねぎで涙が出るのは切る時だけ、あと、玉ねぎを切る際は鼻に詰め物をするか、口で呼吸をすれば泣かないぞ」

皆人の料理を初めて食べた二人は涙ぐんでいた。

「お袋の味って言うんだよねえ、最初の人俺の料理食べると何故か泣くんですよ、『懐かしい』『心が温まった』とか言ってる」

食器を洗いながら会話を進める。

「俺、親の作った料理食べた事無いんだ、偶に近所の人料理作ってくれるけどその味をすっかり覚えてさ、この味が俺にとってのお袋なんだよな」

「孤独な生活は苦しかったですか？」

「そこそこ、近所の人偶に親切にしてくれたから大丈夫だった」

「へえ、と言うかその近隣の人を置いて幻想郷に来てよかったんですか？」

「良いの良いの、どちらかと言うと置いてかれたのは俺だから」

「えっ？」

「それより、椀、帰るの？」

「はい、ここに居ると尻尾を撫でまわされそうなので」

尻尾を押さえ、文を警戒しだす椀、文は手をワキワキと厭らしく動かし、戦闘態勢に入った。

「文さん、そこまでにしましょう、また明日触らせてもらえば良いじゃないですか」

「そうですね、明日は首輪を持って行きましょう」

「趣旨変わってないか？」

夜の妖怪の森に笑い声が響く。

空に散らばる星は地を照らし続けていた。

そして男の幻想郷での生活の初日も幕を閉じかけていた。

番外編・アルバイター秘密の夜その一

「寝たか……………」

皆人は文の就寝を確認すると外へ出た。

夜を照らす星空の下、皆人はポケットサイズの日記帳とペンを取り出し、星明りを使い、日記帳の最初のページに何かを書き始めた。

『十二月一日

香霖堂で購入した日記とペンに今日から一ページずつ日記を付けようと思う。

幻想郷はとてもいい所だ、問題無く日々を楽しく過ごせるだろう。今回付ける事は幻想郷での生活についてだ。

妖怪と戦闘に入った時、どう対処すればいいのか。

紫さんにも話を伺ったが、眼には眼を妖怪には妖怪と言う事だ。どうも彼女は少し抜けている点がある。

現代での生活は醜い物だらけだった、

せめてこちらではマシな生活を送りたい。

追伸、アルマゲドン見たかったな』

「この位か？」

日記帳を閉じ、ポケットへと突っ込んだ。

「月が綺麗だな」

幻想郷初日、衝撃と環境の変化の所為で何故か寝付けない、未知の世界に興奮しているのか、明日から妖怪と共に送る生活に怯えているのか、理由は解らなかった。

「退屈はしないと思うけど、まあ、自分次第か……………」

ただ一つだけ、理解できる感情があった。

絶対的な孤独感、別に寂しいわけではない、だが顔見知り居ないだけで心に穴が開いた様だった。

「さてと……………明日から頑張る為に寝ますか」

05 - アルバイターの和解（後書き）

主「昨日は良かった、特に飛行機が空中ではじけ飛んだ時が」
皆「オイ、執筆しろイピカイエ」

番外編・アルバイター秘密の夜その一

「寝たか……………」

皆人は文の就寝を確認すると外へ出た。

夜を照らす星空の下、皆人はポケットサイズの日記帳とペンを取り出し、星明りを使い、日記帳の最初のページに何かを書き始めた。

『十二月一日

香霖堂で購入した日記とペンに今日から一ページずつ日記を付けようと思う。

幻想郷はとてもいい所だ、問題無く日々を楽しく過ごせるだろう。今回付ける事は幻想郷での生活についてだ。

妖怪と戦闘に入った時、どう対処すればいいのか。

紫さんにも話を伺ったが、眼には眼を妖怪には妖怪と言う事だ。どうも彼女は少し抜けている点がある。

現代での生活は醜い物だらけだった、

せめてこちらではマシな生活を送りたい。

追伸、アルマゲドン見たかったな』

「この位か？」

日記帳を閉じ、ポケットへと突っ込んだ。

「月が綺麗だな」

幻想郷初日、衝撃と環境の変化の所為で何故か寝付けない、未知の世界に興奮しているのか、明日から妖怪と共に送る生活に怯えているのか、理由は解らなかった。

「退屈はしないと思うけど、まあ、自分次第か……………」

ただ一つだけ、理解できる感情があった。

絶対的な孤独感、別に寂しいわけではない、だが顔見知り居ないだけで心に穴が開いた様だった。

「さてと……………明日から頑張る為に寝ますか」

番外編・アルバイター秘密の夜その一（後書き）

主「『裸Ｙシャツ真理教』か『裸タンクトップ正義教』………ど
つちを立ち上げればいいと思う？」

皆「何考えてんだオイ！ 執筆しろ！」

06 - 求人

時刻は既に昼、

「あやや？ 皆人さん如何しました？」

「ん？ ああ、文。ちよつと、人間の里で求人板見てこようかと思
いまして」

「……………その変な言葉遣い止めない？」

「へっ？」

「敬語と標準語の混ざり合う口調はもう止めないって相談ですよ」

先日からも文は違和感を持っていた、稀に敬語を使ったり、標準
語に戻ったりと変な口調には文は疎外感に似た物を感じていた。

「標準語で良いですよ」

「そ、そうか？」

「と言うか、何で仕事探しに？」

「働いてないと生きた心地がしない人間なので……………」

「寂しかったら死ぬ因幡の兔ですか、貴方は……………ここで働い
てください」

「でも……………」

皆人は文の大体の事を柵から聞いていた、皆人が悩んでいるのは
『幻想郷最速』の件である。

幻想郷最速、人間の方にも候補は居るらしいが、『努力家』と言
う二つ名があるので却下されたらしい。

字が汚い、飛ぶ事は出来ない、出来る事は炊事に洗濯、家事程度、
それならば里の居酒屋辺りで雇って貰おうと思ったのだ。

「助手じゃダメですか？」

「助手？」

「ええ、永遠亭なら飛べる薬ぐらい作って貰えそうですし、それに
貴方はここで私と共に過ごしますので一緒に居た方が良いかと」

「一理あるけど……………」

それは確実に人間を辞めるルートだった、だが、『足手まとい』の烙印を押されるのも時間の問題だった。

「まあ、行くだけ行ってみましょうか」

「し、視界が……………これがブラックアウトと言うものか」

文に抱かれた皆人は音速のスピードで飛ばれ、Gと風圧のお蔭で意識が朦朧としていた。

「大丈夫ですか？」

既に千鳥足の皆人は竹に凭れかけ、ゆっくりと休んでいた。

皆人と文の居る迷いの竹林、竹と竹との間から眼を光らせる一兎が不穏な笑みを浮かべていた。

「ウサウサ、今日は生きの良い得物が二人ウサ……………」
指を鳴らすと足元に無数の兎が集う。

「さあ、行くウサ！」

その一言を合図に白兎は方々へと散って行った。
「パーティへようこそ」

「ふむふむ、その映画と言う物は中々面白そうですね」

「ああ、特にダイハードシリーズが一番のお気に入りだな、でも最近は体を張ったスタントが無いから残念、格闘だったらジャッキーシリーズかな」

竹林の中を二人で休憩がてら歩く、右も左も前も後ろも竹一色、まるで迷った様だ。

「迷いましたね」

「だろうと思ったよ」

「まあ、飛べば何とかかなります」

「その代わり音速の壁を超えないでくれ、体が持たない……………」
「……ってアレ？」

隣に居た文はまるで蒸発したかの様に跡形も無く消えていた。

「おーい、文？　ぶっ飛びガール？　幻想郷最速？」

「ここですよー」

声の聞こえる方を見るとまるで誰かが掘った様な穴があった、近くには『細い木の枝』『木の葉』等、落とし穴製作に使われたアイテムが散布されており、悪意的に作った物だと分かった。

「大丈夫ですか？」

落とし穴を覗き込み、現在の文の状況を確認する。

「ええ、でもとりもちみたいなのに体の自由を奪われました」

「如何すれば良い？」

「そうですね、背後に気を付け、近くに居る兔を叩きのめしてください」

「背後？」

ゆっくりと振り返ると小さな白兔が自分を押している事に気付く。

「兔……………」

可愛らしい瞳をウルウルとさせ、こちらを見つめる兔達。

「兔……………」

可愛らしい兔を見て涎を垂らし、一度唾を飲み込み喉を鳴らす。

「兔の肉は引き締まった足が美味いと聞くが……………お前等は如何なんだ？」

皆人はまるで人が変わった様に兔を見つめる、そう、貧乏人にとつて『肉』とは猫に鯉節、馬に人参、貧乏巫女に白米である。

「兔鍋……………」

可愛い兔は恐怖に駆り立てられ、赤い瞳に涙を溜め、ガクガクと震えていた。

「今晚は兔料理かな？」

押している兔の塊を文の落ちた落とし穴へと投げ入れる。

「ぎゃあああああ！　謎のモフモフが私を潰すううううう！」

「スマン文、俺、兎狩りに行ってくるわ!」

「おっと、勝手に私の配下の兎を捕まえなるなウサ」

皆人の背後から足払いで皆人をこか

「どちら様で」

「因幡てゐ、ちよつと……………」

「ああ、皆人さん、そいつ捕まえてください」

「オーケー」

「ちよつ、人の話は最後まで聞くウサ!」

06 - 求人（後書き）

主「来週の月曜は俺の誕生日！」

皆「10月24日か、おめでとう」

主「その次の日に修学旅行！」

皆「ハードスケジュールだな……………」

主「その週の土曜に同人誌漁りに大阪へ」

皆「が、頑張れ」

07 - 狩人（前書き）

十五歳になりました、とりあえず盗んだバイクで走りだしたい。

07 - 狩人

皆人は腰に下げているの黒い袋から武器を取り出した。

「さあ、新しい武器のお披露目だ」

取り出したのは『メリケンサック』、主人公が持って良いとは思えない赤と黒の交わったカラー。

持ち主である皆人自身も目が本気だった。

「もふもふう」

蚊帳の外ではなく、穴の中、兎の高級毛皮の布団で文は違う意味で昇天しかけていた。

「仕方ないウサ、この迷いの竹林最強の武人である私に素手で挑もうとは……………」

「えっ最強！」

「嘘ウサ」

てゐ皆人の一秒の隙を狙い、背後へと回り込んだ。

音等は聴覚に入らず、気配も消し、一瞬で背後へ回り込んだ。

何処から取り出したか解らない杵で皆人の後頭部を殴り付けようと大きく構えるが、いち早く殺気に気付いた皆人は前へ飛ぶ。

「人間は騙しやすいウサね」

杵を軽々と片手で持ち上げているてゐ、皆人はメリケンサックをはめ、走り出した。

「真っ向勝負……………受けて立つ！」

土壇場の野球選手気取りで杵を構える、片足を上げ、杵を強く握る。

「今ウサ！」

てゐは杵をバットでも振るかのように一本足打法を決めた。

皆人はメリケンサック装備の右フックを杵に向かって放つ。

両者の武器はゴツと言う鈍い音と共に砕けた。

てゐの杵は粉々に砕け、少し長い棒だけが残り、皆人のメリケン

サツクは罅が入り、皆人の拳も砕けた。

右手を押さえながらその場で悶え苦しむ皆人、てゐは『そんな鉄の塊で杵と戦う何てバカ？』とでも言いたげな表情をしていた。

『れない事』も大切である。

「何言ってるウサ、明らかに自滅……」

右手に力が入らなかった、徐々にてゐは自分に起こっている変化に気付き始めていた。

「香霖堂で買った対妖怪用グッズ『粉末睡眠薬』だ、いやあ、何でこんなのが道具屋で売られてるかは謎だけど」

「右手の事は気にしてないからぐっすり寝な」

「文、いい加減に高級鬼地獄から這い出て来い」

穴の奥からもうふにやらけて、役に立たない酔っぱらいの様な声が聞こえて来る。

07 - 狩人（後書き）

主「明日から修学旅行、感想の返信は木曜日になります。

東京でまずはナズーリンの元ネタの東京デイズ二……ゲフンゲフン！に行ってきます」
皆「お土産よろしく」

08 - 竹林の奥

皆人は文が満足するまで小一時間ほど待った。

実際は文は何故か布団にされていた兎達に救出された、今も皆人の背中でぐつすりである。

てゐは置いて行くのは可哀想だと判断したので左腕で抱きかかえてお持ち帰り中。

「まったく……………」

右手の拳は砕けた、正確には人差し指と中指の骨が完全に折れていた。

実質、悪いのはてゐである、だが武器を構えた自分にも非がある為に怒れない。

「分かれ道か」

二手に分かれる道、丁度目の前に右『永遠亭』、左『コロンビア』と書かれた看板が立っていた。

「コロンビアって……………」

そこへてゐの配下の兎が皆人の先頭へ現れた。

兎は迷わずコロンビアに向かった。

「コロンビアに行けと？ まあ騙されたと思って行きますか」

迷いの竹林の奥深く、永遠亭。

「てゐ？ 何処に居るの？」

ブレザー姿の少女、真っ赤な瞳にてゐとは違った長く、長く伸びているウサ耳少女が箒片手に歩いていた。

「まったく掃除サボって……………ってアレ？」

「あ、人……………モドキっぽいのが」

兎に導かれ永遠亭に辿り着いた皆人、汗臭さが鼻を刺し、汗が視界を濁らせる。

「すいません、この兎の知り合いですか？」

「あ、はい」

「自分はこの背中の射命丸文の……友人の若津皆人って言います、あのとりあえずコイツを……」

そう言つて左肩のてゐを目の前のブレザー姿の少女へ渡した。

「私は鈴仙・優曇華・因幡、てゐの事はありますがとうございます、てか何でこんな状況に？」

「てゐ、悪戯、死闘、無力化、後二時間で目を覚ます」

「いや、そんなキーワードだけ並べられても……まあ理解は出来ましたけど」

何故か警戒されているのに気が付いた、確かに人間が妖怪二匹を背負つただけでも不思議がられるだろう。

「あと、出来れば包帯とか貰えませんか？」

骨の折れている右手をうどんげに見せる皆人、うどんげは警戒心を解き、潰れた拳を触りだす、てゐと一緒に屋敷に入って行くと薬と救急箱を持つて来た。

「大丈夫ですか！？」

「ちよつと右拳が粉碎しただけなんで気にしないでください」

「気にしますよ！ 大方、てゐの悪戯で怪我したんですね」

「クロスカウンターしようとしたら杵に大粉碎つてわけですよ」

「意味がわかりません」

如何でも良い話をしながらうどんげは必死に包帯を巻く、そこで相方の文が目を覚ます。

「ハッ！ 椀と八雲藍のふわふわ尻尾地獄が消えて行く……」

「……おや、如何しました？」

「役に立たない上司を背負つて来た自分が馬鹿みたいに思えてきてるんですよ」

はあとため息を吐き、肩を下ろす。

「アハハ、まあ、中に入ってください」

永遠亭の中は広がった、あちらこちらにバイオマークが部屋にあつたり、中にはもう異臭と謎の呻き声も聞こえて来たりする。

「何かもう敵の本拠地並みの緊張感なんだけど、セーブポイントくれない？」

「人生にそんな物が在ってもセーブ前に電源がブツンですよ」

「私のトラウマアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

「のわっ！ 貞子かと思つたわ！ てか誰？」

「私は蓬莱山輝夜、なあに気軽に姫様と呼びなさい」

「二トトですよ」

文が横やりを入れる、二トトと言う言葉を聞くと皆人の眼が光る。

「……………二トトは社会の敵だ」

「私を敵扱いするなんて……………良いわ、私と勝負しなさい！」

「何だ？ ポーカーか？ ババ抜き？ それとも大富豪？」

「いいえ、モンハンよ！ どっちが優秀か勝負！」

「わかつたけど、ちよつと待ってこつちの仕事もあるから」

「永琳さん、どうも射命丸文です」

「あら、如何したの？ 新聞のネタ何か無いわよ」

白衣に身を包む女性、八意永琳、さっきの二トトの家庭教師的な人物だがこの家の家計の約九九%が彼女の薬で形成されている。

「いえいえ、助手が出来たのですが、飛べなくて困っていたので秒速三六〇mで飛べる薬がほしいんですが」

「それって音速ですよ、軽く人間辞めますよ」

「貴方が……………」

永琳はまじまじと皆人を見つめる、興味を持っている様な、何かを期待している様な眼である。

「貴方………うとんげ 兎は何処が一番おいしいと思う？」
「兎ですか……… もも肉だと思いますが」
「太股ももねえ、中々良い趣味ね」
「は、はあ………」

「何故でしょうか、お互いの話あっている内容は違うのに」ここまで
噛みあう謎のシンクロ率は………」
「私も何故か悪寒が………」
天才と変態は紙一重であった。

08 - 竹林の奥（後書き）

主「話のストックが切れたので一時休載とします、次の投稿は来週の木曜にします、ごめんなさい、修学旅行の疲れを取ります、それじゃあいつちよ大阪で同人誌漁りじゃあアアアアアアアアアアアア！」
皆「メツさ元気やん」

09・記者見習いの試練

カメラのレンズから夕暮れの妖怪の山を覗く皆人、上手くピントが合わせられずに一時間以上が経過していた。

「……………難しいな」

持っていたカメラはインスタントカメラ、高性能ではなく、時たま動かなくなったりもする。

本来なら、文と同じデジタルカメラで写真を撮るのだが、皆人は断った。

皆人曰く『見習いはまず基礎の基礎から習うのが良い』だ、文のデジタルカメラならピントを合わせす事もいと容易いのだが、皆人の熱意を買った文も古いインスタントカメラを手渡したのだ。

さらには『折角飛べるなら飛んで撮影したい』等と馬鹿な事を考えたので折角ピントを合わせても、その場でグラつき、ブレた写真しか撮れない。

「仕方ない、もう少し高度を下げるか」

皆人が居るのは上空三〇〇m、幻想入りの際に落ちた高さと同じである。

写真が上手に撮れないのは高度による恐怖だと考え、ゆっくりと下降していく。

「やっぱり慣れないな」

人間には翼など付いていない、空を飛ぶには鉄の羽が必要であった、それでも人間は単体では飛べない。

それが実際に出来ていると慣れぬ浮遊感と高所の恐怖が精神を狂わせる。

「これぐらいで良いか」

高度を下げ、上空一五〇m、それでもまだ高い方である。

「次は絶対に」

カメラを覗き、再びピントを合わせる。

「うおっ！」

だが不意に突き飛ばされ、またもぶれた写真が撮れた。

「その人間！」

幼い容姿、背中に結晶の様な物を生やし、宙を浮く少女。

「えっと……………」

「あたいと勝負しよ！ 弾幕ごっこ！」

「だ、弾幕ごっこ？」

この幻想郷での正式な勝負方法、それが『弾幕ごっこ』である。
揉め事の解決の手段に用いられるのが弾幕ごっこなのだが、一部では自分の暇つぶしで行う妖怪も少なくは無いらしい。

「アタイはチルノ、早速だけど弾幕勝負」

「いや、俺は弾幕が出せないから無理なんだ」

「人間って飛べないわよね、ならあんたは人間じゃないんじゃ？」

「まあ、そうだけど」

「ならさ！ その手に持つてるのであたいを撮ってみてよ！」

幼女は皆人のカメラを指差す、だが皆人は再び山を撮ろうとカメラのピントを合わせながら言った。

「被写体が悪い」

「ムキー！ アタイの何処が悪いの！？」

「そうだな、あと地球が十一回位回転したら良いぞ」

「わかった、でそれって何時？」

「今から三四六八九六〇〇秒後」

「分かった……………アレ？ 何時？」

「十一年後だ」

「アタイの事バカにしてるでしょ！ いざじんじょーに！」

チルノは急に冷気を纏い、力を溜める。

その力はチルノの細い腕へと蛇の様に纏わせ、氷柱を飛ばす。

「うおっ、危ねえ！」

避け切れぬ数ではない、だが弾幕初心者に弾幕は危険である。
されに氷精であるチルノの弾幕は氷や冷気など冷たい物に関連し

ている。

弾幕の所為なのか周囲の気温は徐々に下がり、体力も落ちて行き、共に反応速度や瞬発力が落ちて行く。

「アタイは強いからこてしらべに……………氷符『アイシクルフォー』！」

チルノの背後に出現する無数の氷柱、連続で放たれる氷柱を避けながらシャッターを切る。

出てきた写真を見て見るがピントが合って無く、イマイチぼやけている。

「クソッ！ ダメか」

再びピントを合わせながら弾幕を避ける。

「次こそは……………」

再びシャッターを切る、目の前に迫っていた氷柱は消し飛び、代わりに一枚の写真が出て来る。

写真は弾幕の氷柱を綺麗に写し出していたが、肝心のチルノは氷の羽しか写っていないかった。

「アタイは止まらないよ！」

徐々に加速する弾幕の嵐、冷気で手がかじかみ、カメラさえまともに撮れなくなっていく。

「これで、どうだ！」

不意に撮った一枚、これも失敗し、弾幕の氷柱かせ頬を掠る。

出てきた写真は弾幕は捉えているものの、肝心のチルノはピンボケしており、イマイチ分かり辛い。

「またダメか」

ゆっくりと飛行する中、再びレンズからチルノを見る、すると意外な発見に出くわした。

「何だアレ？」

チルノの頭部、花飾りの様な物を見つけた。

赤い綺麗な花、さっきまで着けていなかった物がチルノの頭に在ったのだ。

「まあ、良いか」

再びピントを合わせるがイマイチ上手くいかない。

「そこ！」

「うおっ！」

チルノの不意の一撃、皆人は氷柱を避け、シャッターを切る。
事故で撮った一枚の写真に皆人は驚いた。

「撮れてる……………」

チルノの左半身、多少のピンボケはあるがピントは合っており、
チルノの愉快そうな表情が撮れていた。

「……………」

写真を見つめ、考えた皆人、再びカメラを構え、今度は写真を撮る集中力を半分に減らし、動体視力へ意識を回す。

チルノの方へ飛んだ、飛び交う弾幕を避け、カメラのレンズを通さず肉眼でチルノを見る。

「一考え《イメージ、捉え、そして……………」
ロックオン

氷柱が再び頬を掠り、カメラのレンズがチルノを捉えた。
シャッター
「写す！」

にとりの工房、面倒臭そうな顔で文が訪ねた。

「にとりさん、皆人さんがここに……………」
ぐっすり寝てますね」

「川で再びサルベージ、カメラも壊れてたけど今直し終わったよ」

にとりが普段着を脱ぎ、黒いタンクトップとジーンズ姿で機械を弄る、にとりは魔法使いから貰った服装を大分気に入っている。

晴輝は毛布に包まれ、ぐっすりと眠っていた。

「桜から連絡は受けました。氷精とやり合ったそうですね、まったく冬の氷精に人間が挑むなんて自殺願望でもあるのですかね？」

「彼が撮った一枚見る？」

にとりが手渡す一枚の写真、文はその写真を手に取り見ると、興味深そうな目で写真を見つめる。

「中々上手く撮れていますね、弾幕も一発ですが納まっていますし、まあ初心者にはこの位ですかね」

写真にはチルノが映っていた。写真の枠ギリギリに納まった氷柱、その後ろにチルノが構えている。

「褒めてあげたら？ 沈んでた時その写真を握り締めてたんだから」
「そうですね、そうしますか」

初めて撮れた写真を毛布に包まっている皆人の懐へと放り込む。
自然と皆人の顔が満足げに見えたのは夢の中で成功した写真を見て笑っているのだろう。

そう思い、文は飛んで行った。

「アレ？ 皆人は如何するの？」

09・記者見習いの試練（後書き）

主「今回は異変、ラブコメ二割増し、バトル三割増し、自重四割減で何時も通りの投稿となっております」

10 - 博霊神社

チルノと戦った翌日、文にデジカメを渡され、博霊神社へと連れて行かされた。

普段のまったりしたムードから一変、皆人自身も緊張の海へ沈むとは思わなかった。

神社の一室に集められ、机を囲んでいた。

「これが問題の種……………」

緑髪の女性が机の上に転がせた種、これが『異変』を起こす物らしい。

異変とは幻想郷で起こる大規模な事件の事だ、十回ほど異変が起きているらしく、大半が博霊神社の巫女である博霊霊夢によって解決している。

「まったくこんな物……………何で地上に在るのが謎だわ」

緑の綺麗な髪を右手で弄る女性、風見幽香、四季のフラワーマスターと呼ばれている、この女性が今回の一件を知らせたのだ。

「この種は本来なら魔界で咲くはずの毒の花、それが私の畑で育っていたのよ」

「花の除去を貴方が依頼するなんて……………明日はお賽銭でも降るのかしら？」

一人だけ緑茶を堪能し、炬燵で丸くなっているのが博霊の巫女である博霊霊夢、こんな体たらくな姿を見ると異変解決のプロだとは思えない。

「どちらかと言うとキノコが降って欲しいぜ」

能天気にあう金髪の少女、幻想郷人間最速の霧雨魔理沙、魔法の森と言う場所で店を営んでいるらしい。

「私はそうですね……………合体口ばとか浪漫ですね！」

二人目の緑髪の少女、妖怪の山に在る守矢神社の巫女東風谷早苗、少しずれた感性の持ち主だが、一応は妖怪退治のプロフェッショナル

ルである。

「それでこの種は如何いう毒を持っているのかしら？」

霊夢が自分で脱線させた話を戻させる。

興味あり気に種を持ち、凝視する。

「これはね、一応は食用で美味しいんだけど……………」

食用と言う単語に反応した霊夢は立ちあがり、指をパキパキと鳴らし始めた。

さっきまで如何でも良さそうな顔をしていたが、何故か真剣な顔で腕を回し始める。

「最後まで聞きなさい……………この種には魔界の瘴気が大量に含まれているわ、辺りに瘴気を撒き散らしながら成長し、やがては赤い花を咲かせるわ」

「ちよっ！ それってヤバいんじゃない？」

「魔理沙も最後まで人の話を聞きなさい……………咲かせると言っても満開まで二十年近くかかるし、何より貴方達は瘴気が微量でも出たら気付くはずじゃないの？」

「危険物の除去に主人公チームが集まるのは分かりますが……………」

……………何故私達が？」

「新聞記者はお呼びだけど貴方はお呼びじゃないわよ」

指を指された皆人、だが幽香の声には反応せず、深刻な顔で舌を向いていた。

「……………人間が私を無視するなんていい度胸じゃない」

「す、すいませんが自分は無視して話を続けてください……………」

……………」

「はあ……………まあ良いわ、この花は少し前に私の知り合いが危険だと言って全て油物にして食べたわ、でも何故か的確な数字で幻想郷にあるのよ……………全部で四つ」

「そりやまた具体的だな……………まるで誰かが持って来てバラ撒いちゃったのか？」

「その事は私が調べるとして……………この花の危険な所は一つ、

形ある物の体内で育ち、体の外で花を咲かせるわ。たった二日で「ッ！」

全員の表情が変わった、全員が真剣になり、話を真面目に聞き始めた。

「本来なら瘴気は外へ出るのだけど、それが後者なら別……………」

……瘴気は体を巡り、普通の人間なら閻魔の所へ、妖怪、妖精、魔理沙と霊夢みたいに力を持つ者なら異常な力を得るわ、簡単にいえば氷精でも私以上の力を出せるわ」

幽香の話を聞いた皆人は顔色を悪くした。

何かに気付き、今すぐに心の引つ掛かりを取り除きたくて仕方なかった。

「も、もしも、幽香さんの話の氷精の花が成長したら如何になりますか？」

「そうね、瘴気は体を蝕み、死ぬか命尽きるまで狂うかのどちらかね」

その言葉を耳にした直後、皆人はポケットから写真を取り出す。

先日、チルノとの弾幕ごっこで撮った写真を見る。

「もしかして……………これですか？」

幽香に震えた手で写真を渡す。

眼を細めて写真を見る幽香は一気に顔を青くした。

「え、ええ……………」

それがまるで競技のスタート合図の様に皆人はその場を取り出した。

「み、皆人さん！」

出遅れて文が飛び出した。

それに続き霊夢、魔理沙、早苗も続いて飛んで行った。

10・博霊神社（後書き）

主「今回もハーレムが諦められない俺参上！」
皆「何言ってるんですか？」

11 - 氷精と蛙

妖怪の山の守矢神社。

「今日こそアタイが凍らせてあげる！」

「ふん、たかが氷精のくせに生意気だね……………今日は盛大に血祭りに上げてやる！」

守矢神社では今日も氷精チルノと諏訪子との激戦が繰り広げられていた。

氷精を食べる蛙、蛙を凍らせる氷精、犬猿の仲とはこの事だろう。

「今日のアタイはぜっこーちようなんだ！ 今日も元気に氷漬け！」

「昨日は負けたけど今日は神としての威光を見せるよ！」

諏訪子は構え、お手製の鉄の輪を取り出した。

両者、頭に血が上っている所為かチルノの頭の二輪の花に気が付かなかった。

「花の特徴は一つ、『好戦的になる』『力が増す』の二つ、絶対に見つけ出さない！」

それを聞くと五人は方々へと散って行った。

霊夢は賽銭……………情報集めの為に人間の里へ、魔理沙は魔法の森の方へ、早苗は文と皆人と共に妖怪の山へ急いだ。

「そう言えば……………俺がやられる少し前に『アタイつてば最強ね、蛙を……………』如何とか言ってた」

「なら守矢神社に急ぎましょう！」

幻想郷最速の名前は伊達ではなかった。

一瞬で皆人と早苗から距離を離し、一人で飛んで行ってしまった。
「クソッ速過ぎて着いてけないぞ……………」

「えっと……………皆人様……………で良いのですか？」

「え、ああ『文々。新聞』の手伝いをしてる若津皆人、東風谷さん

で良いか？」

「ええ、構いません」

「軽い自己紹介はしたし、とりあえず守矢神社へ！」

激戦地守矢神社、巨大な氷の結晶や辺りに落ちている鉄の輪を文は踏み歩く。

巨大な白蛇も凍らされていて、修羅場とはこの事を言うのかもしれない。

「息を殺して……………」

カメラを構え、歩く、不意の襲撃に備えるがその姿の敵の本拠地に放り出された一人の気弱な傭兵であった。

まるで木々の様に氷柱が立ち並び、戦地は異様な緊張感に包まれていた。

ピシイと足元の氷が割れ、音が響く。

「そこか？」

文の目の前に走る人影、その形相は不信感と緊張感に押しつぶされ無表情であった。

文が守矢神社に降り立ち数分後、皆人と早苗は二人で行動を共にしていた。

「構えといってくれよ……………」

「はい」

互いに声を押さえ、ゆっくりと進む、いつの間にか戦場一帯がサイバル化していた。

物音を立てれば敵に気付かれる、ここまで派手にやらかしている
と二人の理性は飛んでいるのだと確信に近い物を持てた。

「てか、守矢神社にはもう一人神様が居るだろ……………そっ
ちは？」

「神奈子様なら他の神の所へ飲みに行きました」

「イピカイエ……………仕方ない、ここは俺たちだけで」

皆人は足場に落ちている鉄の輪を拾い氷柱目掛けて投げた。

音を立て落ちる鉄の輪、それに誰かが反応したのか足音が近づく。
「とりあえず、隠れていてくれ」

「は、はい」

早苗は皆人の背後に隠れる、皆人はカメラを構えて動かない。

鉄の輪の落ちた場所へ誰かが近付いて来る、それをカメラに撮り捕縛する作戦である。

皆人のカメラは文と同じ仕様で、弾幕や人物を撮れば相手を一時的に無力出来る。

「三、二、一、写す！」
シャッター

シャッターを切った瞬間、カメラはある一枚を撮った。

それは右手だった、まるでカメラのレンズを覆う様に右手が写してあった。

「東風谷さん！」

皆人は早苗を突き飛ばし、カメラを放り投げた。

チルノの左手は先端の尖った氷柱を持ち、皆人の腹部を狙い刺した。

「くっ！」

チルノの攻撃は皆人の右腹部を掠るだけだった、皆人は肘と膝で氷柱の槍を砕き、左手でチルノの胸ぐらを掴み、力を込め頭突きをした。

「早苗さん、下がってて！」

晴輝は落ちて来たカメラを取り、構える。

「……………氷塊『グレードクラッシュャー』」

両手を地面に合わせ、チルノは呟く。

すると地面が青く光り出し、冷気に包まれる。

「皆人さん！」

早苗の声を聞き、全力でジャンプした。

さつきまで立っていた場所は巨大な氷塊が現れた。

「……………冷体」

チルノは眩き、消える。

「居なくなっただ？」

辺りを見渡すが何処にも居ない、あるのは氷塊と早苗の姿だけであつた。

不意に皆人の腹部に謎の一撃が入る、その一撃は誰が何をしたのかが分からない、ただ腹部に激痛が残る。

「そこか！」

背後へシャッターを切るがなにも撮れない、だが頭部に衝撃が入つた。

「クソッ……………」

必死に考える皆人、不意に頭に非常識な思考が浮かぶ。

それは『目に見えぬ速さでチルノが攻撃している』だった。

子供の様な単純すぎる考え、そんな事を考えている内に次の衝撃が背骨に入る。

「冷符『瞬間冷凍ビーム』」

耳に囁くような声、悪寒を感じた皆人は両腕をクロスさせ、防御の構えをした。

細長い超低温度の一線は皆人の左脚を凍らせた。

「うおっ！」

いくら浮遊しているとはいえ、空中でバランスを乱すと落ちるのは普通、左足もバランスをとる重要な役目を担っていたが凍りつき、歩行の役目すら放棄した。

目の前に現れたチルノは笑う事も無く、悲しむ事も無く、何の表情を見せずに人差し指で皆人を指した。

「こんの……………バカ妖精が！」

皆人はその場で無理に前に一回転し、凍りついた左足で踵落としを見せた。

踵はチルノの肩へ入り、チルノは表情を変えず、肩を押さえた。

「まだまだ！」

次にチルノの胸ぐらを掴み、体を大きく仰け反り、頭突きをした。
「もう一発！」

もう一度チルノの頭部目掛け、自分の額をぶつけた。
両者共に限界で二人一緒に地面へと落ちて行った。

「いてえ……………」

氷柱に凭れ、体を休ませる皆人、服は所々破れ、左脚は冷凍され動かず、腹部から血が出ていた。

「だ、大丈夫ですか！？」

「ああ、ちよつと掠った程度だから……………いやあ、弱って無かつたら勝てなかつたな」

「そんな気楽に！ 今救急箱取って来ますから安静にしてくださいよ」

そう言うのと早苗は神社へと走り去って行った。

チルノの頭の花は萎れ、皆人が触れると砂の様にサラサラの粉末となり風に飛ばされていった。

チルノはボロボロの格好で能天気には寝ていた。

「ん……………アタイは……………さいきょーなんだよ……………」

「まったく、まあ良いか」

その後意識を失い、四肢を投げだし皆人は寝てしまった。

11・氷精と蛙（後書き）

主「アンケート機能がほしいですな……………」

12・守矢

皆人は守矢神社の一室で寝かされていた。

原因は緊張に押し潰れたからだ。

「それで……………諏訪子様は敵味方も気付かずに暴れていた……………と？」

早苗が仁王立ちし、諏訪子が正座していた。

救急箱を撮りに行っている際、何故か文と諏訪子が戦っており、流れ弾を数発貰った早苗は堪忍袋の緒を切らし、弾幕の嵐をぶつけた。

「あーうー、これには先祖代々から受け継がれる氷精を倒せと私の右手が唸るんだよ！」

「諏訪子様そっちは左手です」

チルノと諏訪子のケロ？対戦（笑）は終結した。

チルノは被害者であるので怒るのも気が引けたので諏訪子が全面的に説教を受けている。

「まあ、守矢の一件は守矢同士が解決するとして……………この瘴気の花の種は妖精、妖怪、霊、人間の全てに効果があります、私は新聞を使い危険な事を幅広く認知してもらい、守矢一家にもぜひ協力して頂きたいのですが……………」

「わかりました、幻想郷の為に努力します、それなので……………皆人さんの事なんです」

「紹介を忘れていました、彼は私の下で働く助手でして、若津皆人と言います」

「偶にで良いのですが彼とお話しさせてくれませんか？」

「え、まあ良いですが……………その代わり貴方の知っている守矢の暗部とか色々聞いて良いでしょうか！」

記者である文は情報を得る方法に手段は選ばない。

盗撮、盗聴は彼女の基本でもあったりする。

「そう言う事は神奈子様と話してください」

「あの人は逃げ道を多く持っているので逃げられたら逸らされたりするんですよ」

ため息を吐き、カメラを取り出す文、部屋から出て空を見る。

「……………皆人さんの事は心配じゃないんですか？」

「彼みたいな年頃の人間はこう言う湿っぽい嫌いますからね、放つとくのが一番ですよ」

「そうですか、では私は彼の包帯を取り換えてきますね」

早苗は救急箱片手にそのまま部屋を出て行った、気の所為かその瞬間早苗がとても良い笑顔を浮かべて行った。

「はーん、そう言う事が」

諏訪子は何かを悟った、そうしてまるで娘の成長を温かく見守る母親の様なうつとりした顔をしていた。

「んで？ 君は如何するのかな？」

「私は新聞を作つて来ます、皆人さんが起きたら帰らせるようにしてください」

「君も中々逃げるのが得意だね、流石は新聞記者」

「褒めても何も出ませんよ」

文は翼を広げ飛び去って行った、その顔は少し切なさそうに見えるのかは彼女しか知る者はいない。

昼が過ぎ、日も沈み、辺りがすっかりと暗くなり時刻は七時前、幻想郷一帯は大雪に見舞われていた。

皆人も顔を冷やす冷気で眼を覚まし、体に巻かれた包帯を触っていた。

「打ち身と、擦り傷って所か……………良かった……………のか？」

実際、体を動かすと疲労と睡魔が精神を蝕む、再び温かい布団に潜りたいと言う誘惑に負けそうになってしまう。

だが誘惑に打ち勝ち、手際良く布団を片付け、部屋を後にした。

「寒ッ！」

縁側を歩く皆人、外は大雪で風も強く、帰るには視界が悪すぎる。

「明日は雪だるまでも作るか……………」

そんな能天気な事を言っていると前から早苗が歩いて来る。

「あ、皆人さん」

「怪我の手当てはありがとう、とりあえず帰らないと言いたいけどこの吹雪じゃ帰られないか……………」

「あの、ご飯食べて行きませんか？ 食べ終わる頃には雪も弱まっているかもしれませんし」

「え、でも」

「今日は鍋ですので大丈夫です、奮発してお肉もありますよ」

「お肉……………ハッ！ い、いや、悪いですよ、大丈夫です吹雪ぐらい……………」

タイミング悪く皆人の腹の音が早苗の耳へと入ってしまう、早苗はクスクスと笑い、皆人の手を引っ張って行った。

ぐつぐつと煮立つ鍋、それを囲む様に座る神が二人、先ほど帰って来た八坂神奈子と諏訪子であった。

「足音が……………神奈子、良いね」

「あ、ああ」

襖を開け、皆人が早苗に手をひかれ入って来る。

「ほ……………」

神奈子が何かを察したように声を漏らす、足を崩し、何時もの様に気楽にしている。だが諏訪子とは違うまるで娘の連れて来た男を見定める父親の様な鋭い眼をしていた。

皆人は数々のバイトから得た経験を身に沁み込ませ、今では直感

だけで今何をすれば良いのかが理解できてしまえる。

喉を詰まらせ、汗が噴き出る。

鋭い槍を向けられ、反撃の手を考える様な、そんな感覚に似ている。相手を見定める緊張感と心臓を握り潰す様な迫力、アルバイターには避けては通れない道が在る。

『面接』

その者の能力を測る為の試練とも言える、皆人はこれまで難なく面接をクリアしていたので忘れていた。

押しつぶされる様な緊張感、一歩間違えてしまえばそれでお終い。背水の陣に立たされた気分である。

「（試されてる？ 数々の面接で手に入れた秘儀を見せると気が本当に来るとは……………ん…やべえ、汗と震えが……………）」

鼻で大きく息を吸い、気持ちを落ち着かせる。

「どうも、若津皆人と言います」

「諏訪子から聞いてる、まあ座れ」

それを聞き、皆人は正座をした。

「堅苦しいな、足を崩しても構わないんだぞ」

「あ、はい」

皆人は神奈子からそれを聞き、足を崩す、こつという厚意は度が過ぎない程度で受け取るのか一番である。

「早苗、酒の準備を」

「はい」

早苗は酒を取りに部屋を出て行ってしまう。

場は静まり返り、鍋の煮立つ音が部屋の空気をより一層重くした。皆人は面接と言う物が苦手であった。

相手が何を考えているのか、自分は如何いう行動をすれば良いのか、そして何より後の無い背水の陣と言言葉が何よりも苦手であった。

「朝はありがとね、いやあ、ああなると止まらないんだよね私」

切りだしたのは諏訪子であった、彼女の顔を見ると軽くウインク

をして、アイコンタクトを取る。

朝の一戦の件、あの事に悪気を感じているのか、手伝ってくれるのだと思い、話を繋げる。

「いえ、自分は別に何もしてません」

「またまたあ、早苗を助けてくれたし、私達は感謝してるんだよ」

「ああ、私からも礼を言うよ」

「それでさあ、早苗の事を如何思う？」

「如何思うとは？」

「可愛いとか好みだとかそういう外見や内面の話だよ」

「綺麗ですよね、何と言うかこう、気品が在って素直で、少し抜けてそうだけど可愛らしいという………か」

まるで蛇に睨まれる蛙が如く、神奈子は皆人をさつきより鋭い眼で見つめていた、その背後にはとぐろを巻く大蛇の姿が見える。

皆人は咳を一つし、「自分とは比べ物にならない素晴らしい方だと思います」と言い直した。

大蛇はそつと身を隠した。

「（今のを言い続けてたら喰われてた、確実に自殺ルートだった、何だ東風谷さんは触れない方が良いのか？）」

「ねえ、体の方は如何思う？」

「か、体！」

気の所為か神奈子の背後から『ゴゴゴゴ……』と言う謎の擬音が聞こえて来る。

「（あ、あれ可笑しいな体が震えて来るぞ？ 寒いのかな？ かな！？）」

「いやだなあ、肌の色とか身長とかそういう話だよ、如何いう話だと思ってたの？」

「（体型とか胸の話だよバカヤロー！ 解るか！ 体の話で肌の色とか身長とかではなく、あの大きなメロンが気になるわボケ！）」
彼女は渡り船を出す女神ではなかった、ただ空から高みの見物をしている鳥だった。

「（クソツ、泥船に乗らされた気分だよ！）」

挽回の手立てを考える皆人に神奈子から一喝。

「早苗を厭らしい眼で見たら消すぞ……………」

神の一言だったのか、母親からの一喝だった所為かその言葉には重みがあり、間違えればアルマゲドンの引き金を引く事になるだろう。

「はい……………」

皆人は既に涙目であった。

「神奈子様、諏訪子様」

だが本当の恐怖は目の前の二神ではなかった。

神奈子の背後に立つ酒瓶を持った早苗、顔は笑っていると言つのに、背後に何かを出していた。

蛙とか蛇とかではない般若そのものだった、その顔は微笑みを止めず、諏訪子と神奈子の間へと座る。

「さ、早苗？ 怒ってるのか？」

「いえいえ、神奈子様、私はこの程度じゃ怒りませんよ」

とか言いつつも、酒瓶を握る手には血管が浮かび上がるほどの力を入れている。

「わ、わかった、まだ私の反省が足りなかったんだね！」

「違います諏訪子様、私はただ恩人でもあり客人でもある皆人さんを面白半分に『冷やかし』たり『消す』と言う毒を吐くのは如何なものかと……………」

「いや、別に気にしてませんよ！ 偶に友人とかに冷やかされたり、毒吐かれたり…………… いえ何でもないです」

蛇睨みの眼光、二人の弁解が喉の奥へと戻ってしまう。

「ちよつと向こうでお話ししましょうね……………」

12・守矢（後書き）

最近、パソコンばかり触っていて親に「受験大丈夫か？」と言われまして。

心にぐさりと刺さる物がありました。

自分は得意科目『妄想』『計算』の二つしかないので心配です。今週の金曜にテスト（明日だけ）がありますので必死に勉強しようと思います。

とりあえず目標の点数を目指すために（ストックがないので）土曜日は休日になりたいと思います。

皆さんも勉強頑張りください、努力すればいつか神はほほ笑むと信じて。

13・男の周り（前書き）

タイトル変更しました。

読みは『東方勸楽録』

『とうほうぐらんくろく』です。

13 - 男の周り

夕食後、勢いを増すばかりの吹雪の中を決して帰宅しようとする
が東風谷さんに止められた、とりあえず選択肢は『神社に宿泊』か
『遭難して凍死』のどちらかだった。

渡された布団を一室に敷き、そこで寝る事にしたのだが、寝る寸
前に東風谷さんが枕を持ってやって来た。

「あの、外のお話とかして貰えませんか？」

男女が同じ部屋で寝るのは如何かと思っていたが、持って来た枕
で顔を隠し、恥ずかしそうにこちらを見る姿は正直反則であった。
敷いた布団の上で話をした、何を話せばいいのか解らず仕事関連
の話をしたが不評だった。

本人は面白いと笑っていたが遂には欠伸を出させてしまう。

そこで趣味である海外映画の話をすると以外にも好評、日付が変
わった事も知らずに話しこんでいた。

「それでさあ、ダイハード5の情報があつてさ、またもあの人事件
に巻き込まれてんだよ」

「本当にお好きなんですね、映画」

「ああ、昔から映画好きでバイト代の大半はDVDとか映画とか
に消えてったよ」

「ご両親都かは如何したんですか？」

「両親は分からない、孤児院育ちだし、名前もとある人から貰った
んだ」

「す、すいません、そんな事も知らずに……………」

「……………少し昔話をしているか？」

三日月が天高く上がり、誰もが寝静まった孤児院。

「よし、いいぜ皆人」

「オーケー、荷物渡すぞ」

一m程度のレンガの壁を男二人が挟むようにして立つ、片方の男は孤児院の外、もう一人は孤児院の中である。

「深夜の逃亡劇……………くうううう！　こう言うのに憧れる！」

「うるせえ。皆人、少しは静かにしろ」

皆人が男に荷物を渡し、皆人が壁を超えて孤児院を脱出した。

「案外あっさり抜け出せたな」

「確かに、まあ、明日になっても搜索願は出ないだろうな」

俺達の孤児院の人間は最悪だった、孤児院の管理を孤児自身にさせ、自分はパチンコや賭場ではしゃぐダメ人間だった。

それで孤児総勢五人は脱出を決行した。

奴は孤児一人ひとりの顔や名前すら覚えていない馬鹿だ、なので通帳やら食料やらが無くなっているにも気付きはしない。

「如何する？　関東に逃げるか？　関西に留まるか？」

「関西の方が良いだろ、田舎が良い、生活費が安く済む」

「こう言う事は俺よりお前の方が頭いいな皆人さんよお」

「お前が馬鹿なだけだ」

そんな会話をしつつ歩いて関西を放浪した、偶に警察に声を掛けられるが直に撒いて逃げた。

そして着いたのが月一万弱のボロアパートだった。

二人でバイトをして、一緒にバカやって春が過ぎ、夏が過ぎ、秋が過ぎ、冬が過ぎ四年が流れた春の日、アパートには皆人しか帰ってこなくなった。

一人での生活は自由が無く、毎日が厳しい状況下だった。

一週間水飲みの生活や、調味料だけで過ごしたり一年が経った。

「何だよこれ」

何故かドアの前に何も書かれていない履歴書とボーダー商事のチラシが置いていた。

「……………」

まるで花の蜜に誘われた蝶の様に気が付けば封筒に履歴書を入れ、神社の前に立っていた。

「お願いします……………」

賽銭箱に封筒を入れ、神社を去った。

その一週間後に紫と出会った。

まるで消えた男が、俺を地獄の様な節約生活から抜け出させてくれる為にしてくれた恩返しだったのかもしれない

「とまあ、こういう過程があり居間に至るってわけだ」

「不思議なお話ですね」

「ああ、他の孤児仲間には死んだ死んだって言ったけど、俺は幻想郷で生きてるんじゃないかって思うんだ」

「そうだと良いですね」

「ああ、ふわあ……………」

大きな欠伸をして布団に横になる。

「そろそろ寝ましようか」

「何か、忘れてる様な気が……………くかー」

「……………助けてくれてありがとうございます」

早苗は皆人の手を握りそう呟く、本人が寝てしまっても思いは伝わったと信じ、寝てしまった。

13・男の周り（後書き）

皆「どうしてタイトル変えたんですか？」

主「いや、友人に『タイトルがイマイチ』とかバツサリと言われましてね、

考えたのが『道楽』ですよ、道楽と働くを上手く合わせた造語ですよ。

意味は働く事を楽と考えるですよ。

後、友人に『小説家になりたかったら文章だけで読者泣かせてみる！』とかも言われまして、恋愛＋シナリオ＋時たまギャグ重視で書かせていただきます」

14 - 新しい始まり

妖怪の山は一面白く覆われた、雪が積もり、皆が除雪作業をしていた。

「昨晚はお楽しみだったそうで……………」

文は何故か不機嫌そうな顔でそう言った。

「仕方ないだろ、冬なんだし大雪で帰れなくなっても」

皆人は普段通りの薄着の格好で守矢神社に作られた大雪を眺めていた。

「寒くないんですか？」

「凄く寒いが我慢我慢、貧乏だったし、着る服が清潔だったらまだ良しさ」

皆人は雪を素手で触り、形を作って行く。

雪はどんどんと形を成し、次第に一つの造形物になって行った。

「出来た」

雪は刃渡り1mの巨大な刀へと変貌し、雪独特の白い輝きを見せていた。

「白狼の雪太刀」

四角形の台座に刀を突き刺した様な造形物、それは白く美しく輝いていた。

「貴方は本当に何者ですか！」

「ハッハッハッ褒めても良いぞ！」

文に自分が何者かを尋ねられたが胸を張り、人間ですと答える皆人。

「これが本当の天狗ですね」

「私が！ この清く正しい射命丸が天狗です！」

「いや、そう言う意味で早苗さん言ったんじゃないと思うけど」

そんな会話をする中、不自然な雪の塊が皆人の視界に入る。

何故か高く積もる雪、素手で雪を覗いて行く皆人の手に何かが触

れる。

「……………手？」

も少し深く掻き分けると次に見覚えのある帽子が出て来た。
円らな瞳の着いた帽子、そして謎の手、朝っぱらから何か見当た
らなかった人物。

「諏訪子様あああああああああああああああ！」

皆人の人生の中でこれほど驚き、大声を叫んだ事は無いだろう。
雪を取り除くと諏訪子が幸せそうな顔で永眠的な意味で寝かけて
いた。

「それでねえ……………私ったらおこたの中で蜜柑食べてたんだ
けど、何か体が凍えてね……………」

「蜜柑違う！ それ雪！ 起きてください諏訪子様、死んじやいま
す……………よ？」

諏訪子を掘りだすが諏訪子の手になにかが捕まっていた。

それも人の手、そう言えば昨夜から諏訪子と共に神奈子も居な
かった気がする。

素手で雪を掻き分け、手が霜焼けをしているが構わずに掘り続け
る。

「か、か、神奈子あああああああああああああ！」

人生最大の叫びは再び妖怪の山を木霊した。

「いやあ、危うく冬眠しかけたよ、アツハツハツ！」

「いや諏訪子、冬眠どころか永眠しかけたんだが……………」

二人を熱湯風呂へ服を着たまま投げ入れ、湯を頭にかけてながらゆ
つくりと解凍し、冷凍保存されかけた二神を再び現代へ呼び戻した。
「まあ、大方早苗さんに外に放り出されて寒さ凌ぎにかまくらでも
作ってたんでしょう」

「いや、吹雪が止んだ頃に暇だから雪合戦してたら諏訪子と共に疲
れて寝てしまってたな」

「あんた等、たかが雪合戦で死にかけてどうする……………」

「いやあ、そう褒めないでよ。ねえ神奈子もう一戦する?」

「そつだな体も温まったし……………」

「……………あんた等二人が神だと言う事に疑問を感じるよ」

「悪いな、展開が速すぎて読み込めない、何だつて?」

集めた雪を広げ、山を作り、壁を作り、かまくら、雪だるま、等身大スケール桜等を作り、何故か文、桜、俺と神奈子、諏訪子、早苗の三対三に分かれて雪合戦をする事になった。

文も既に大雪の事を新聞にし、ネタを探して暇だったらしく、参加し、桜も連れて来たのだ、何と言つか常識人が早苗と桜、非常識人が諏訪子、神奈子、文だった、自分より偉い神を吹雪の夜に投げだす早苗も早苗なのだが。

常識人と非常識人の温度差が激しい、例えるのであれば北極とエジプトぐらいの違いだ。

「と言う訳で、守矢一家対天狗組+おまけ、雪合戦大会!」

諏訪子が景気良く大声で切りだすがテンションが上がらない俺と桜、早苗は空元気でテンションを上げ、文に関しては「神に勝てば私は神の幻想郷最速!」とか言つてやる気満々である。

「おまけ……………ねえ」

だが皆人の闘争心に火が付いた、まるで自分が戦力にならない様な数え方だったのが気に食わなかった様でポケットから何かを取り出す。

「あや? それは何ですか皆人さん」

「……………塩」

皆で使える豆知識、雪に塩をかけると化学反応で雪が硬くなるよ、かまくらを作る際には使おう、リア充野郎を冥土へ送るときは塩で固めた雪玉で相手を殴りつけよう。

14・新しい始まり（後書き）

主「皆は真似しちゃだめだよ！」

15 - 真相と真実

諏訪子、神奈子、文、皆人の四人で愉快に丸めて固めた雪玉が飛び交う守矢神社の境内、突如スキマが現れた。

「楽しそうね……………」

皆人は紫の前に正座させられ、

「いえ、すいません」

つつい雪合戦で熱狂し、自分を拾ってくれた紫の顔面へ塩で固めた雪玉をぶつけてしまった。

「まあ良いわ、皆人、貴方は里へ行きなさい」

「里？ 何か用事でも？」

「除雪作業の手伝い、昨日の猛吹雪で人間の里が雪で埋もれてるのよ、偶には人助けもしてみたら？」

皆人が「そう言う考えも妖怪にもあるのか？」と言えば話は続く。

だが皆人は何も言わずに頷いた。

人間、妖怪と区別するのは流石に失礼である、同じ世界に生きる者であるのだから同じ扱いをしなければならない。

「スキマから行きなさい、そっちの方が速いから」

紫は扇子を開き、同時に里行きのスキマが開通した。

「文さんに話通しといてくださいね」

「ええ、行つてらっしゃい」

皆人がスキマに入る、紫は扇子を閉じると同時にスキマを閉じた。

「あやや？ 皆人さん何処ですか？」

「ちよつと里まで働きに行つたわ」

「……………スキマ妖怪がこんな所に如何したんですか？」
文はカメラを構え、距離を取る、だが紫はそんな文に眼向きもせず、神社の方へ向かつて歩き出す。

「少し、ここの神と話すだけよ」

「私も貴方に個人的な取材をしたいのですがよろしいでしょうか？」

「そうね、私も彼の生活を知りたいし、貴方にもこちら側に来て頂きたいと思っていましたの」

扇子を広げ、自信のポーカーフフェイスを保つ、だが不気味なほどに口元は笑っていた。

皆人は里へ来たのだが、目の前に広がる光景は白銀の世界、里など言える者は無かった。

「何だこれ？」

その言葉意外なにも出なかった、降り積もった雪の量は多く、太股が埋もれるほどだった。

「里は何処だよ……………」

そう言っただけで歩くが面倒になり、飛行する。

近くに在るのは森と赤い屋敷、そして方向を変えれば妖怪の山、場所からして里の反対側だろう。

「畜生、仕方ない、飛んで行きますか……………」

皆人は空を舞い、適当な方向へ飛ぶ、数分ほど経って、人里が見えてきた。

そつと着地し、里へ入ると誰もが屋根の積雪に困り果てていた。

「とりあえず手伝うか」

先に行ったのは老人が梯子に上ろうとしている家である、老人を説得し、スコップを借りて雪を払いのけて行く皆人の姿を見て他の人々が依頼にやって来る。

あつという間に皆人は『気の良い外来人妖』と言われ、一躍有名になって行った。

守矢神社の一室、紫、諏訪子、神奈子、そして文の四人が座っていた。

「それでは話し合しましょう、これからの幻想郷の未来永劫の為、

そして幻想郷に住む娘たちの為に」

15 - 真相と真実（後書き）

主「ババアの陰謀……………グホアっ！」

16 - 語られるの真実か

守矢神社の薄暗い一室に集う四人、陽気な雰囲気は消え去り、重い空気が全員の口を固く閉ざした。

「誰も喋らないのであれば私から……………」

扇子を広げ微笑む紫、その笑みも一瞬で消え、真剣な表情へとなった。

「私達がしているのは幻想郷の『支配』」

「支配……………自分の思い通りの駒を作ろうと言う事ですか？」

少ないヒントから導いた文の考えは紫の首を立てに頷かせる事は無かった。

「『コントロール』ではなく『去勢』とでも言いましょうか……………」

……………一年前、自分のテリトリーを守る為に人間を八つ裂きにした『お花妖怪』の事は覚えているかしら？」

「風見幽香……………」

幻想郷には『太陽の畑』と言う向日葵畑がある、ちょうど妖怪の山の反対の方角である。

そのこの主の風見幽香と言う妖怪は『フラワーマスター』と言う可愛らしい名前とは裏腹に『妖怪最強』の異名を持つ。

「あやや、確か外来人が風見幽香の庭に入り、跡形も無く消された奴ですよ、一年前の……………」

「そう、彼は私が連れて来て、彼を畑に行かせたわ、一人で全員が生睡を飲んだ、簡単に言ってしまうえば間接的に人間を殺している事になる。」

「別に私は拒否しても構わないと言ったわ、でも彼は三つの条件を飲んでくれるのなら良いと言ったわ」

紫は右手を前に出し、親指と小指以外の三つの指を立てた。

「要求は『自分の事を外界から完全に抹消する事』『自分の名前を

昨晚皆人と会話をしていた、皆人自身は死んだ友人の事を覚えていた。

早苗はまるで今来たかのように表情を繕い、襖を開け、湯飲みを全員の目の前へ置き、部屋を後にした。

16・語られるの真実か（後書き）

主「文語力に自信がありません……………」

17 - 師匠

幻想郷へ来て十日が経った夜、毛布に体を包み、白い息を吐きながら日誌のページに今日の出来事を書く。

恩人の紫の注文が多く、人間の里や迷いの竹林などへ足を運ぶ事が多くなった、もしも社員として採用されれば色んな所へ派遣されるが、現状満足であった。

宙に浮ける人間と少し里の人間には差別される事があるが、除雪作業の手伝いか里の皆とは仲良くやっていけている。

里では慧音さんや妹紅さん等の友人も出来た、新しい出会いが楽しみでもある。

「さてと、寝ますか……………」

毛布に包まり、固い地面に横になる、だが冬だと言うのに今度も薄着で眠れなどしなかった。

外を眺め、雲ひとつない夜空には無数の星が散りばめられており、皆人の悪心が眼を覚ます。

「ふあ…………… 如何しました、皆人さん……………」

文が眼を覚まし、布団の上へ体を起こす。

「ちよつと散歩、文は寝といってくれ、明日はゆっくり休んでいいぞ、俺がついでに配つとくから」

文を再び寝かしつけ、毛布をマントの様に着け、ウッドハウスを出た。

「さてと、少し飛んでみるか……………」

浮遊能力を手に入れ、一週間が過ぎた今、自由自在に空を舞う事が出来る様になった、だが文と一緒に飛ぶ事は未だに…………… 一生出来ないだろう。

「遊覧飛行でも楽しめましょうじゃありませんか……………」

夜空を舞う皆人、その眼に少年の様な輝きを宿らせ、適当な方向へ飛んで行ってしまった。

三分ほど飛行し、体が冷えて来たので地面へ降り立ち、冒険をしていると八目鰻の屋台が眼にとまった。

鰻の良い匂いが心なしか体全体を温めてくれる。

「いらっしやいませ」

マントにしていた毛布を丸め、達筆な字で『うなぎ』と書かれた暖簾を潜ると女将の様な可愛い姿の少女が出迎えてくれた。

「すいません、鰻を一つ」

背中を羽を見る限り、彼女も妖怪なのだと理解は出来たが他の妖怪の先客が居た。

「酒だあ酒持つて来い！」

「いい加減にしな、財布の紐が緩み好きだよ！」

泥酔の息を超え、顔真っ赤にして酒を要求する頭に二つの角の生えた少女、そして顔を赤面させるがまだ理性の残っている狸の尻尾を着けた少女、一目で人間でないことが理解出来た。

「たつく、鬼つてのは酒を水みたいに飲むのかい？」

「酒は私の生命線、アルコールは私の活力剤！」

「すいません、隣良いですか？」

「ああ、良いよ。私らこそ騒いじゃって悪いね」

「いえいえ、妖怪も人間も飲んで騒ぐのが一番ですから」

と言っても自分は酒を飲まない、別に二十歳じゃないからではない、酒の席で酔っつてしまえば他の奴らを止める人が居ないからだ。

文は最近俺が居る所為か酒を良く飲み、赤裸々な思ひ出話を暴露している、当人は覚えてはいないが、最近下着が小さくなりすぎて困っているらしい、実際は体が成長しているからではないのかと思っている。

「はい、どうぞ」

妖怪の少女は鰻の蒲焼を皿に載せ、出してくれた。

それを受け取り、香ばしく焼けた鰻に噛り付き、口の中でよく味

わい飲み込む。

「美味い！」

声を上げて言ってしまう、だが美味しい物は美味しいのだから仕方がない。

「うん、こんな森の中に店を開かなくても里とかに行ったら絶対繁盛するよ」

「いやあ、少し有名人と言いか何とか………」

少女は少し照れくさそうに頭を掻き、いそいそと鰻を焼き始めた。

「お主、名は？」

「俺は若津皆人、人間」

「俺は二ツ岩マミゾウ、妖怪だよ」

マミゾウの隣の少女は片手を上げ、手を左右に振り出した。

「私は鬼の伊吹萃香ああああ」

そう言い終わると手から力が抜け、そのまま重力に逆らう事なく落ちて行った。

萃香を除き、マミゾウと会話を始める二人、皆人はマミゾウに酌をし、鰻を食べている際、皆人が口を開いた。

「マミゾウさん、弾幕の放ち方ってのを教えてくれませんか？」

「力のない人間が弾幕の放ち方何か知って如何する」

「一応は放てるんですよ、ただ弾幕何て数えるほどしか見てないんでイメージが湧かないと言うか………」

右手の平を広げ、力を込める、そうすると銀色の球体が手の平の上で形を成そうとしている。

だが皆人に潰され、球体は消えてしまう。

「まあ、良いじゃろうその代わり 事は師匠と呼べ」

「師匠……… それでは師匠、ご指導よろしくお願いします」
「うむ、良いじゃろう」

既に日が上ろうとしている今、妖怪の森で一組の師弟が生まれる。

17・師匠（後書き）

主「マミゾウさんはやっぱり東方五老衰の新しry」

18 - 修行

早朝、新聞を配り終わり、皆人は朝飯の準備が終わるや直に外へと出て行く。

「皆人さん、おはようございま……………あや？ 居ませんね」
机の上に用意された白米と味噌汁、焼き魚、それと一枚の紙の切れ端を見つける。

「なになに『修行、問題ない、昼には帰宅』……………『修行に行ってくるけど心配するな、昼前には帰って来る』ですか……………私も昼までのんびりしますか」

たった一人残された文、特にやる事も無く、時間だけが残る。そんな文の視界に入っただのは皆人が包まっている毛布だった。

「彼の毛布……………」

文は毛布を手に取り、顔を埋めてみた。

「……………すう」

少しだけ臭いを嗅いでみる文、気恥ずかしくなって毛布を投げ捨て、頬を赤く染める。

「何やってるんですか私は……………」

最近、気が付けば皆人の方へシャッターを向けていた、何時からかは分からないが、必死に働いている皆人の姿が気になってしまう。
「心配してるだけで……………そう、彼の友人の事でまだ少し困惑してるだけなんだから……………」

そう自分に言い聞かせるが何故か心がこの回答に拒む。

「はぁ……………如何したんでしょうか」
実は文にも秘密が在った。

皆人と早苗と一緒に寝る前、襖越しに皆人の友人の件を聞いてしまっているのだ。

何かスクープが在るのではとか思っていたのだがこんな事スクープには出来ない。

「……………」
文は自分の財布を握り締め、家を飛び出した。

修行は守矢神社付近の大きな池で行われた。

神奈子、諏訪子には承諾を得ている為、多少ド派手にやっても構わない。

池に無数にある柱の上へ座り、マミゾウの授業が始まる。

「弾幕は周りの状況をいち早く判断し、弾を如何避けるかをする遊びじゃ、殺しにかかってくる妖怪も居るが はその類ではない。とりあえず実戦が一番、無理だと思ったら池に飛び込めばいい」

「あの師匠、冬だから飛びこんだら凍死します」

「嫌なら必死になって弾幕を避ければいい」

単純な事ほど難しい事は無い、選択肢は『弾幕に当たって再起不能』か『冬の池に落ちて凍死』の二択である。

「それにしても寒い格好じゃな」

皆人の服装は変わらずの薄着、それも色が落ち、色んな所が解れている。

「服は欲しがらないのか？」

「別に肌さえ隠せれば構いませんし、余裕がありませんからね」

人間である皆人には妖怪と戦える程の力は持ち合わせておらず、カメラと香霖堂で手に入れた武器が命綱であった。

最近では木刀を買い、財布の中も余裕はない。

「……………」まあ、本人が良いのなら構わんが」

「それではよろしく願います」

皆人は古ぼけた鞆からカメラを取り出すがマミゾウがカメラの所持に反対した。

「そんな意味のわからない物を使わんと素手だけで掛かって来い、若いのだからそれくらいは当然じゃ」

カメラを鞆に仕舞い、池のほとりへと置き、池に神々しく聳え立

つ柱の上へと飛び乗った。

手を前へと構える態勢をとるマミゾウに対し、皆人は直に足が動く様に軽い運動を始める。

弾幕を避けるのに必要なのは『俊敏さ』『知力』『体力』そして僅かでも良いから『根性』である。

ヘタレならば足が竦んで動けず、上半身と下半身が分離か消滅するだろう。

「よし、まずは基本から」

刹那、彼女から放たれる無数の弾幕。

マミゾウが弾幕で見えなくなった。

正確には弾幕の精密さが死角を作った。

その死角はあまりにも大きく、そして避ける幅が人がギリギリ入り込める程しか無かった。

弾幕の中を潜り抜けるが息が上がり、気が付くと弾幕と自分の頬が擦れていた。

「あああああああああああああああ！」

弾幕を避ける為体を捻るが態勢を崩し、肌寒い冬の池へと落ちて行った。

「うう……………面目ない」

「全くだな、人間辞めたら多少は視力位上がるかも知れんぞ？」

池で凍え死にそうだったマミゾウが皆人をサルベージし、現在焚火の前に人間を辞めるか相談を受けていた。

「まだ人間で居たいです……………」

「なら体を鍛えるのが一番、これを着けてみたらどうじゃ？」

渡されたのは鉄の輪であった、まるで罪人が着ける様な拘束具に似たそれが四つ、皆人に手渡された。

「重っ！」

「一つ二貫の鉄の輪じゃ、手首足首に着ければ嫌でも筋肉が着いて

来るぞ」

二貫、尺貫法で一貫は三、七五？で、一つ七、五？、それが四つなので現代で言う三十？である。

「時が経てば着けている事を忘れるだろう」と呑気に呟くが普通の人間は三十？の体の变化など直には着いて行けない。

だが皆人はそれを黙って道具を着けるのであった。

18・修行（後書き）

主「次回はついにデレエ丸の登場じゃない！」

19 少女の買い物

妖怪の森の前、一件の木造の家屋が香霖堂である。

その香霖堂に珍しい客が二人来ていた。

「それで……………君は何が御所望なのかな？」

「男物の服、貴方ぐらいの体格の服を探しています」

「何で私まで……………」

香霖堂には鴉天狗と白狼天狗の二人が店の中を歩き回っていた。

店の中を物色して行く文、そして何故か耳を引っ張られて着いて行く。

「男物……………ああ、彼の服か」

「いえ、椈の男装写真集でも作る……………」

「作らなくて結構です！」

素直に自分の心を表現できないと言うのはある意味厄介なのかもしれない。

「でもここにあるのは外界の服ばかり……………彼がこっちに

住みつくのだから里とかで売ってる品の方が良いんじゃないか？」

ハンガーに掛けられたパーカーを見て口を固く閉ざす文、そんな姿を呆れたのか空気を読み、椈が口を開く。

「恥ずかしいなら恥ずかしいって言えば良いじゃないですか」

「だって……………男の人に何かプレゼントした事ないし、気に行ってくれるか如何か分からないし……………」

頬を膨らまし、パーカーを見つめる文、自分が今どんな顔をしているのか気付いていないらしい。

「そう言えば、彼は黒い色が好きだとか言ってたな」

「ッ！」

「あと出来れば活発に動きやすい服が良いと」

「ありがとうございます！ 行きますよ椈」

椈の尻尾を片手で強く握りしめ、文はそのまま香霖堂を出て行く。

「きゃう！尻尾はらめええええええええええええええええ！」

椋の喘ぎ声は文の『モフモフ』への愛情を倍增させ、文に空いた片方の手を使わせる。

椀の叫びが外から聞こえる最中、香霖堂の主人森近霖之助は本を読みながら呟く。

「もうじき春か」

それはどっちの意味なのか何に対しての言葉なのか、それを知るのには咄嗟に口に出した本人にも分からない。

「重い……」

昼時になり、皆人はマミゾウとの修行を終え、鴉天狗の住宅街に帰って来た。

住宅街と言うよりは木造住宅密集地と言った方が良いのかも知れないのだろうが。

「三〇キログラムは流石に重い……」

両手をぶら下げ、上がらぬ足を引きずって帰って来た。

「ああ、また飛ばないといけないのか……」

達筆な字で『射命丸』と彫られている書かれた木を見つけ、五、六mほど宙を飛ぶが、手足の錘が重力に従い皆人の四肢を地面へ叩きつけようと引つ張る。

「重い……」

そう言いつつも無事に着き、腰を下ろし休んでいた。

肩を叩き、疲労を取ろうとするが体に溜まった疲労はそれほど簡単には取れやしない。

「温泉にでも浸かりたい……俺温泉に入った事
ないや」

愚痴を溢しながら家へ入ると長細い木の板を見つける。

葛籠であつた。

その上には『気に入ってもらえれば幸いです』と書かれた紙が乗

っていた。

皆人の思考はカメラを構えた一人の記者を思い出す。

「文……………」

中の服を取り出して見る、黒い生地、それは現代のポリエステルのような物ではない、不純物の一切ない絹で出来ている高価な物だった。

「こんな物貰っても良いのか？」

他人の好意を素直に受け取るのも礼儀、だがこれはあまりにも高価すぎた。

皆人の仕事では特に疲労を感じる物は無い。

新聞配達、アシスタント、買い物、弾幕ごっこでの囿役、身代り、盾、様々な仕事をしたが高価な物を貰うほどではなかった。

「明日から倍頑張ろう、いや三倍か」

そう思い服を着替えて行く。

皆人は初めて貰った給料がこんな素晴らしい物だった事を忘れない、そう心に近い、長い袖に腕を通した。

「あやや、まさかあそこまで服を選ぶ事が難儀だったとは思いませんでした」

里で色々な服屋を見て回ったが、男物の服を選ぶ事に縁の無かった私は正直テンパって居た。

どれもこれも同じに見えてしまい、全ての服を纏めて買ってやるうか、とまで思うぐらいだった。

そこへ八雲紫が隙間から上半身を出した。

暇だったからと言う理由もあるが、冬眠前に少し遊びたかっただけだったのかもしれない。

後に紫に頼み、置き手紙と服を家に置いて貰ったのだが。

「心配……………何か絶対裏が在ると思う」

紫の性格上、そして思考の大半は自分の娯楽しか考えていない事

を踏まえ、『何もない』と言うのは無理な話である。

「服を女物に変えたりとかしてたら……………そう、でっち上げてやるわ！」

一瞬言葉が詰まったのは大妖怪に対し、自分が何を出来るのかを脳を必死に回転させ、結論を導き出す為の所要時間である。

「ただいま戻りました……………よ」

私は眼を丸くした。

彼が買った服を嬉しそうに着ていたのだ。

まるで無邪気な子供を思わせる様に、黒い服は彼の何かを引き出していた。

「あ、文、この服良いぜ凄く気に入った」

無邪気に笑う彼は私の心を苦しめる。

何時からだろうか、氷精が暴れたあの日からかもしれない。

彼は必死な顔をして戦った、奇跡的な勝利に満足している彼の顔を取る時、鼓動が一瞬だけ早くなった様な気がした。

その晩、彼が居なかった事に何故か腹が立った。

自分でも馬鹿げていると思うが彼の事になると胸が以上に熱くなる。

私はもしかして彼に……………。

「おーい、聞いてますー？」

「……………あ、はい聞いてます！ その服多少値をはる品なので大切にしてくださいね」

「ああ、大切にする！」

また鼓動が速くなった様な気がする。

だけが私の思っている物なのか結論付けるのは後にしよう。

今はまだ仕事仲間と言う事で満足しよう。

20 - 白狼天狗の悩み

冬の後半、現在十二月十六日。

雪が静かに降る今日は天魔と言う人物、つまり天狗の社会の頂点の人と会ったのだ。

紫さんが話を通してくれた事もあり、意気投合した挙げ句、酒を飲みあい、一緒にドンチャン騒ぎの相手をしていた。

今日は天狗社会の事を知って貰う為に天魔さんは一日だけ特別に白狼天狗の職場へ向かったのだが。

「ねえ、饅頭とって」

「イタタ……………また魔法使いだよ、白黒の……………あ、足とか揉んでくれませんか？」

「まだ良いじゃん、私なんか萃香さん相手にしたよ、一瞬だったけど」

白狼天狗はまるでと言って程に自由気ままだった。

ここは白狼天狗の休憩所、白狼天狗はシフト制だった。

時間帯になると見回りを交代、ここで一時休憩を取るのだが、全員が炬燵に入ったり、お菓子を食べていたり、普段の凛々しいイメージから遠ざかっていた。

そして何故か扱き使われていた。

「あはは、私の部隊ってこんなですけど……………やる時はやるんですよ」

刀を磨く椀、だかそう言うのが説得力がない。

だらけ切った姿からは気高き狼と言うよりは飼い慣らされた犬を思わせる。

「ねえねえ、お兄さん」

「ん？」

一人の白狼天狗の少女が饅頭を加えながらこちらを凝視する。

「恋人いないの？」

「ああ、思った！ お兄さん顔は悪くないし、料理得意そうだし、良く働くし」

「隊長にピッタリじゃありません？」

「なっ！ 私は色恋沙汰なんてまだ……………」

磨き途中の巨大な刀を持ったまま手をブンブンと振り否定する椀、危ないとので傍へ置く。

こほんと可愛らしく咳をすると再び刀を磨く。

「と言うより、さっさと仕事に行きますよ」

だが一人の白狼の少女が椀の尻尾を掴む。

「わはっ！ だから尻尾は……………ダメ、だって」

「隊長つて本当に尻尾ダメですね……………」

「特に付け根が」

そう耳打ちすると全員が眼を輝かせ、椀の尻尾へとダイブして行く。

「皆人さああああああああああん！」

皆人は一人澄ました顔で見回りの準備をしていた。

「まったく、いい加減にしてくださいよ」

尻尾を弄り尽くした白狼天狗の少女や準備を済ませ、ゆっくりしていた皆人達は後頭部を押さえながら、必死に辺りに気を配っていた。

「刀の峰で叩くのは流石に痛い……………」

「自業自得です」

白い息を吐き、辺りを警戒するが侵入者など現れない。

それもそのはず、活発な魔法使いならともかく、大抵の人、妖は家で丸くなっているだろう。

そんな雪の中に駆り出されている白狼天狗が正直不便そうに思えた。

「まあ、自分は編み物でもして気長に敵を待つさ」

懐から毛糸玉と編み物の道具を取り出した皆人は白色の毛糸と製作途中の物を取り出し編み始めた。

「前々から思ってたんですが外で貴方は何をしていたんですか？」

皆人の超人伝説は色々ある。

炊事、洗濯、掃除が出来、裁縫、編み物、造形、造花製作、大量生産までお手の物である。

だが弾幕が物を言うこのスキルが着いていても『便利』なだけで、特に意味は無い。

「何、貧乏と一人暮らしが俺をここまで立派にしてくれたんだよ」

少し眼を離している内に毛糸はどんどん小さくなり、編み物はどんどんマフラーの様に長くなって行く。

「本当に何者ですか……………」

冬は基本的に日の出る時間は少ない、そう言う季節だから仕方ないが、日が沈みかけると言う事はどんどん寒さが増してくるのである。

「侵入者はゼロ、てか逆に他の皆が居なくなっているし……………」

別に居ないのではない、実際は息と気配を殺し、身を潜め、温かい眼差しを送ってきている。

夕暮れの妖怪の山は異様な静けさに包まれる。

「晴輝さんはこの生活には慣れましたか？」

晴輝は一つ目のマフラーを作り終え、二つ目のマフラーの仕上げに入っていた。

黒い毛玉をボロボロの鞆に入れ、手元を器用に動かし、マフラーを製作する。

「まあ、外の貧乏生活よりはマシかな、もやし生活と特売品を狙う主夫の眼は健在だけど……………」

晴輝は笑顔でそう言うが何処か空しそうな顔をして夕焼けをぼん

やり眺めていた。

手も自然と止まり、天を見る。

「まあ、今の生活に感謝しないとな、文は最近優しくなってきたし、早苗さんに肉じゃが分けてもらってるし、今日は大天狗さんと天魔さんに飲み会に誘われたよ」

「す、凄いですね」

「なに、大妖怪八雲紫の駒の俺に恩でも売っとけば後で見返りが貰えると思ってるからさ、天馬さんは俺と飲むのが楽しいらしいよ。気の良い爺さんだし、あの人とは仲良くやっていけそうだわ」

そう言いつつも二つ目のマフラーを編み終え、椀に巻き付ける。それは真っ黒なマフラーで白い毛糸で『白狼』と編まれている。

「あの……………これは？」

皆人は固まった筋肉を伸ばす為、四肢を伸ばし、プレゼントと呟いた。

「日頃からお世話になってるし、助けて貰ったし……………要らないなら捨てて貰っても構わないぞ」

「いえ……………大切にさせて貰います」

そう言う彼女はマフラーを首にしっかりと巻き付け、皆人に微笑みを返す。

背後で温かい眼で見つめていた白狼天狗達は謎の新聞記者になぎ倒されていた。

ツインテールと携帯電話が目立つ鴉天狗の少女、彼女は携帯のカメラレンズで二人を補足しシャッターを切った。

「これは中々良い記事になりそうだわ」

後日、この事は『花果子念報』と言う新聞に掲載され、丸一日妖怪の山で茶化された。

20・白狼天狗の悩み（後書き）

主「十二月だ、彼女がいないクリスマス……………それもおさらばじゃあああああああ！ ここで一句『最愛の彼女は仕事と液晶です』辻虎、今年は添い寝ディスクと妄想がフルに活動する俳句」

21 - 風邪引き天狗

現在、十二月十八日。

来週はクリスマスと言う事で里も山も至る所で宴会の準備が始まっていた。

今回は守矢神社で行われるらしく、文や色々な人、妖怪にビラを配っている。

皆人は今日は週に一度の非番である。

最近はいくつかの給料と休みを貰っている。

最近、文の様子がおかしいと思うが悪い変化ではない。

前日も白いマフラーに『風神少女』と編んだセンス無しのマフラーをプレゼントしたらまるでクリスマスの朝の子供並みにテンションが上がっていた。

俺は貰った事は無いが。

さて、折角の非番なのだが家でゆっくりなどして居られない。そういう性分なのだから仕方がない。

「ここか……………」

着いたのは姫海棠と言う家、二日前、椀との出来事をでっち上げた御礼参りに来たのである。

「すいませーん……………」

木の下から声を掛けるが返事がない。

「留守かな？」

ウッドハウスまで飛び、ドアを二、三度ノックする。

「コホッコホッ……………何？ また茶化しに来たのあ……………」

……………や

家から出て来たのは下着姿のツインテールの少女だった。

下着は上下揃えての淡いピンク、どちらにも可愛らしいフリルが付いている。

体は少し小さく、控えめ、ツインテールと口にくわえた棒菓子と

携帯にヘッドホンを着けていた。

「いや、その若津皆人っていいま……ぐほあ！」

どう反応した分ならず、自己紹介をする男に対し、少女は左手で胸元を隠し、赤面した可愛らしい表情で皆人の顔面を殴った。

「ごめんなさい」

「別に謝る事は無い」

一発顔面を殴られた後、マウントを取られ、そのまま顔面を何度も殴りつけられた。

鴉天狗の見えない黄金の右腕、実際叫びたいほど痛く、カンフー映画にでも出れそうな飛び回し蹴りを見せてくれた。

「気にしないで良い」

「いやでも……………コホツコホツ」

姫海棠はたて、文とはライバルであり、花果子念報と言う新聞を出している。

前日の件で白狼天狗と鴉天狗の購読者が増え、ついでに先日大天狗の皆様にご迷惑かけられました。

ついでに彼女も当事者の桜に追い駆け回され、川に落ちて風邪を患っているらしい。

風邪を引いている相手に仕返し基、御礼返しなど出来やしない。

「……………なあ、鴉天狗ってのは大抵は一人暮らしなのか？」

「……………まあ大抵はね。でも社会を築いた天狗なら大抵は一人でしょ。彼女が出来ない限り」

何故か皆人を見てニヤニヤしている。

「残念だけど、俺と桜は付き合って何かないよ。月とスッポンとでも言っておこう」

「大丈夫、知っててあの記事書いたから」

「おい、もう一回ほど川に飛び込みたいようだな」

腕をパキパキと鳴らす皆人、妖怪相手とは言え、病人を川に突き

落とすのは容易い。

「ゴメンゴメン、それで？ 私の所へ何しに来たの？」

「『鴉天狗の捏造発覚！ 当事者が殴られる現代の少女の思考』と言うのを記事にして貴方の購読者をこちらに来させようかと」

「ごめんなさい、勘弁してください」

少女が頭を下げるまで実に七秒、流石は鴉天狗、自分を可愛がってらっしゃる。

「と言うのは病人に酷だから……………まあ風邪でも治して貰ってから考えますか」

そう言うつと台所へと向かう、急に立ちあがるはたてをベットに寝かしつけ、台所に立った。

だが台所は酷かった。

散乱するお菓子の箱と片付けられていない食器が多々並んでいた。

「これは……………久々に腕が鳴るな」

その頃、ベットに寝かされた少女は恥ずかしさのあまり、顔を真っ赤に染め上げ丸くなっていた。

食器、ゴミ、台所の黒い閃光、日々の生活を脅かすカビ等と激闘し、気が付けば昼になっていた。

部屋は大方片付いたが本人の風邪は一向に良くなならない。

原因は一つ、彼女が下着姿で寝ている事である。

「あの……………フリーダムになるのは自由だけど、そんなんだと風邪は治らないぞ」

「五月蠅い、熱いのよ体が」

だからと言って四肢を冷やすのは体に悪い。

「と言うと思ったからハイ」

彼女の元へ持って来たのは粥と卵酒である。

「あれ……………でも鴉天狗に卵って……………」

「共食いじゃないわよ、鴉天狗って言う妖怪だから。地底の鴉は知

らないけど……………」

そう言い体を起こはたて、その彼女の背中を支え、卯酒を手渡す。

「はあ、何で人間なんかに見病されなきゃいけないのよ」

そう言いつつも卯酒を飲み、ほっこりしている鴉天狗、それを横目に家事を順々と進めて行った。

「変な人間……………」

日が沈み、はたての風邪も順調に回復して行った。

帰る頃にはお菓子の箱を全て片付け終わった。

「それじゃあ帰るけど、大丈夫か？」

「人間に心配されるほど柔じゃないわよ」

彼女にそつと手を振り、皆人は帰って行った。

「あーあ、色々と部屋物色されちゃった」

壁を辿る様に歩き、咳きこむはたてはベットへダイブした。

「調子狂うなー」

ベットの上で毛布に包まり、右手の甲を額に着ける。

「記事の見出し、どうしょ……………」

日が変わり、十九日。

クリスマスまで一週間を切った。

「皆人さん、この記事読みましたー？」

「ん？ 如何した文、何時も以上に上機嫌だな。えつと『お節介男、若津皆人、風邪を患った鴉天狗の家に訪問』…………… ああ、昨日はたてって人の所に仕返しに行こうと思ってな、相手が偶々風邪だったから看病しただけで……………」

「その時の事を詳しくお聞かせくれませんか？」

笑顔で迫る文、血管マークが眼を擦れば、アラ消えない。

その後、少女の地獄の様な取材が始まった。

21・風邪引き天狗（後書き）

主「フラグ建設中……………」

22 - 河童

十二月二十日、大雪が幻想郷を襲った。

文曰く、今年は冬の妖怪が頑張り過ぎていらしい、彼女の直感
は男が出来たと言ってるが俺にはそう感じられなかった。どちらか
と言うと懐かしい感覚がした。

紫からの仕事は日に日に増えて行く、これは段々認められている
からかもしれない。

在る場所に現代から取って来たポストを配置し、それを目安箱の
様に使っている。

赤と言う色から多少気の引けた者も居たが俺の名前を出した途端
に徐々に集まって来た。

勿論の事だが有料、流石は社長、抜け目と言う物は無い。

「さてと、今回は『寒いと年を越せない』、『温かくなれる物がほ
しい』、『同情するなら金をくれ』と里から多数と博霊神社から一
通、如何にかならないか？」

訪問しているのは河童の工房、何故か暖房が全体を暖め、快適空
間を実現していた。

「うーん、人間に電気の取り扱いは危険だからね、でも盟友だから
助けないと……………如何すれば良い？」

「俺が訪ねてるんだが……………」

仕事上、にとりと話す機会も増えている。

「んでにとり博士は何を作ってくれるのかな」

「おお、任せろ！ 私が作る物は河童の最先端技術を駆使して作
る暖房器具、その名も『温かどてら』だ」

「ごめん、その青い口ボットが四次元なポケットから取り出す道具
は何？」

「これはどてらの襟、袖、腰に発熱器具が入ってて、電源をONに
すると器具が熱を発し、温かくしてくれると言う便利グッズなんだ」

「何か実際に商品化してて怖いな、まあネーミングセンスはアレとして、大量生産は出来るのか？」

「一時間で四つ作れる」

「それなら二十個頼む、あと俺の分に一個、文の分にも一個で三二個だ」

にとりはすぐに作業に取り掛かった。

俺は道具の説明を紙に纏めていた。

取り扱い、不具合の場合の連絡、修理について書き綴る。

二時間が経過し、説明書のコピー済ませ、ゆっくり寛ぐ。

「なあ、にとりって人間を盟友盟友って言っけど何か思い入れでもあるの？」

「ん？ ああ、色々だね………聞きたい？」

「暇つぶしにお願いします」

私がまだ人間の事を嫌っていたころだ。

「あ、河童だ！」

人間と眼を合わすだけで怖がられて逃げられたり、興味本位で石を投げつけられたりした。

でもね、ある日、私はあの子と出会った。

人間の小柄な少女でね、人間なのに笑って私の事を手当てしてくれた。

それが始まりだったかな。

22・河童（後書き）

主「次回『ほろ泣きさせたいにとりの裏話（妄想）』」

23 - 河童と少女

その子は里に住む活発な子でね、家を抜け出して私の所に遊びに来たんだ。

毎日毎日、妖怪の居る山へ、彼女は「妖怪と人は別に変わりは無い、力が在るか無いかだけの差だ」って、嬉しかったな。

季節が変わり秋が来た。

彼女と一緒に日が暮れるまで遊んだよ。

日が暮れたら私が里の近くまで送ってあげるんだ、妖怪に襲われない様に。

そしたらね、必ず笑って言うんだ。

「ありがとう」

その言葉だけで私は心が温かくなった。

でも秋の終わり、白狼天狗の山の警戒が強くなったんだ、それでその子も迂闊には山に近づけなくなった。

季節が過ぎ、何年経ったかな、その子が久々に山に来た。

大きく成長して嬉しかった。

背丈も、顔も私より大人びて、前より活発になったんだ。

一年に二、三回しか来なかったけど私はそれで満足できた。

ある年、その子の村を妖怪が襲った、私もそれを聞いて里に飛びだしたかった。

でも妖怪が無暗に人間に姿を現す、それも里に、それは社会を築いた山では許されざる行為だったんだよ。

その日の後、私はお得意の光学迷彩で抜け出したんだ、里に下りると所々が焼けて居たけど死者は居なかった。

私はその子を見つけて話しかけた。

「大丈夫か？」

私はその子に頬を叩かれた。その手は酷く怯えていて、今にも崩れそうなくらい弱々しかった。

「何で助けに来てくれなかったの！」

彼女は私を正義の味方でも思ってるのか、そう思った。

私には鬼の様な力も無ければ、鴉天狗の様な素早さは持ち合わせ
ていない。

私は正義の味方じゃない、そう言ったんだ。

その子は激しく喉を振るわせ、叫んだよ。

「信じてたのに、友達だと思ってたのに！」

彼女は心に深い傷を負って、次の日から遊びに来なくなったよ。

三年が過ぎ、その子に婿が出来た、顔はイマイチだったけどその
子は喜んでた。

七年が過ぎ、子供を抱いていた、可愛い女の子だった。

十年が過ぎ、三人もの子供に囲まれてた、老けてるってのに彼女
は元気だったよ。

二十年が過ぎ、子供の結婚式に大げさな位泣いてたよ。

三十年が過ぎ、彼女は私の存在に気付いたよ、本当に人間なのか
って思ったよ。

五十年が過ぎ、最愛の夫が死んでしまった、でも涙を流さなかつ
た、もう既に乾いてたのかもね、心も体も。

夫が死んだ五年後だ、彼女も寿命が近くなって倒れた。

私は河童だ、乾いてしまえば死んでしまう。乾いた事の無い体か
ら大量の水が流れた。

顔がぐちゃぐちゃになってね、私も意地を張らずに出て行けば良
かった。

でも沢山の人間に囲まれて、見送られるんだ、水を指す事はした
くなかった。

彼女は死ぬ寸前、何をしたと思う？

「にとり……………にとりい」

今にも死にそうなる虫の声で私を呼んだんだ、私は迷彩を解かずに
その子の元へと近づいた。

その子も私が来た事に気付いたのかな、手探りで私の手を掴んだ。

そして命を振り絞ってこう言ったんだ。

「.....ごめん」

そう言うとその子は息を引き取ったよ。

今でも握られた手の感触が懐かしい、今も横で私の機械弄りを見
てる、そう思ってるよ。

「悲しかったか？」

「.....いや、別に私の工具にはあの子の魂
が籠ってる、そう思えるだけで十分だよ」

「.....」

罪悪感、そんな物が心の中で渦巻いていた。

理由はただ一つ、俺と同じだから。

誰かに先立たれるのは悲しい、それは人も妖怪も同じだ。

交友関係が在ればその悲しみは重みを現し、絆が在れば引き裂か
れる様な痛みが在る、愛が在れば叩き壊される様な苦しみが身を襲
うだろう。

だが何があっても、引き裂かれ、壊され、見るに堪えなくなつて
も忘れてはいけない。

忘れなければ、自分が死ぬその一瞬でも思い出せば相手は報われ
るのだから。

23 河童と少女（後書き）

主「旅に出たい、幻想卿に……」

24・忘却の向こう

十二月二一日。

「.....」
朝、手際良く動く両腕、気が付けば味噌汁の具を切り、味噌を解かしていた。

だが眼には光が灯っておらず、何処を見ているのか分からないほど虚ろだった。

「あ、あれ？ 俺は..... ああ、卵が焦げる！」

意識が戻り、焦げて行くフライパンの卵焼きを綺麗に折りたたむ。
「畜生、ああ、何か、また.....」

揺らぎゆく意識、意識が吹き飛ぶ前に日の元を止める。

そのまま床に肉体を叩きつけたが痛みは無く、だんだんと意識が遠のいて行った。

辺りが暗い、誰も居ない、どちらが上でどちらが下なのか分からない世界、だが一つだけ確かな物が存在していた。

自分の目の前にある大きな錠、腕一本入りそうな大きな鍵穴を持つ錠だった。

「何だこれ？」

錠は不気味な物だった。

錠に付く無数の目玉が俺を見つめていた。

「怖っ.....」

気味が悪くなり、逃げ出そうとした。

だが何処からか出て来た鎖に足を取られ、転んでしまう。

不思議と痛みは無く、右手に何かを握りしめていた。

「レンタルビデオの会員証..... そう言えば週二本は借りてたな、懐かしい.....俺のカードじゃない？」

会員証の裏に自分の名前が書かれているはず、なのにカードには若津皆人とは書かれておらず、今にも消えそうな薄い字で別名が書かれていた。

「なんだ？ 能弾^{のた}……………」

その後に之繞があるが何の字か読みとれない。

「……………」何か懐かしい様な気がする」

自分でもわからないがプラスチック製の会員証を握りしめる。

不意に誰かに呼ばれた気がする、誰だかは分らないが懐かしい。皆人は恐る恐る錠に触れる。

「起きてよ！ 人間の人生は八十年、まだ死ぬには若するわよ！」

目の前に文が涙目で居た、皆人の目蓋が開くのを確認すると胸を撫で下ろし、皆人の体を起こした、自分にも何が起こったのかは分からないが異常なほどに体が重かった。

四肢に装備した錘はまるで象の足の様に重く、持ちあがらない。

「風邪でしょうか、体が凄く熱いですよ」

自分と皆人の額に手を当てる文、救急箱を探す。

「……………」

さっきまで何かを掴んでいた、懐かしい何かを。

「ッ！ ああああああああああああああ！」

その時、まるで高い所から叩きつけられる様な激痛が頭に襲いかかった。

頭を押さえ、その場で体を丸める。

「だ、大丈夫ですか！」

「大丈夫……………じゃない！」

皆人は頭を何度も殴りつける、床を這い、玄関に傘置きと共に置いてある木刀を握り、文に投げる。

投げられた木刀を手に取り、皆人は悶え苦しむ中、右手で自分の頭を指した後、木刀に指を指した。

「な、殴れって事ですか!？」

「お願いだ、全力でやってくれ! その後永遠亭に運んでくれ」
意識を飛ばし、柄打を束縛痛みから解放しようとする、原始的な治療法である。

文は躊躇いつつも、木刀の柄を握り締め、風を切る速さで木刀を振った。

木刀は半分ぐらいの長さで折れ、破片が部屋に散乱した。
皆人はその場にうつ伏せ、意識を失くして行った。

24・忘却の向こう（後書き）

主「最近、現実と非現実の世界の区別が出来ません。仕方ない、ちよつと現実の彼女とデートしてきまーす、行くぞお空！」
皆「主が壊れた……………」

25 - 完全な忘却（前書き）

リアル・ステイル見てきました。
中々面白かったです。

家族の愛やロボット同士の殴り合い、最高でした！

25 - 完全な忘却

眼が覚めたら深夜だった。

見知らぬ家の中、物静かな一室が恐怖を煽ぎたてた。

頭に包帯を巻き付け、布団に寝かされていた。

「お目覚めかしら？」

沈黙を破ったのは襖を開けて愉快に挨拶をする紫であつた。

「あの………ここは紫さんのご自宅ですか？」

「ええ、私の家、住人が後二人居るから明日にでも挨拶しなさい」

「いえ、自分が知りたいのは何故永遠亭ではなく、ここに俺が居るのかと言う質問なのです………」

「私の未来の家族ですもの、貴方の事は私も気に掛けているわ」

本来なら文が俺を永遠亭に運んだはずなのだが、結果が違ふ。

「この一件にも貴方が関与してるんですか？」

皆人は何も考えず、口走った。

紫は何も言わず、自分の前にスキマを出した。

両腕を突っ込んだ。

「いたたたたたたたた！」

不意の耳を引っ張られる様な痛み、紫がスキマを使い、皆人の両耳を引っ張った。

「馬鹿な事を言わない、さつさと寝なさい」

そう言つて行つてしまふ紫、皆人は温かい布団に身を包み、睡魔が夢の世界へ誘ってくれるのを待った。

だが睡魔は来ない、ただ時間が過ぎて行くのを待っていた。

これまでに意識を失つてた事が多々あるので睡魔が寄りつかないのだろう。

そう思いこつそりと部屋を向け出した。

マミゾウ師匠直伝の気配を消す術で呼吸と足音が消えていた。

「……………事実を語りましょう紫様、これでは彼の身が持ちませ

ん」

廊下を進んでいくと、光が一室の襖の僅かなスキマから漏れていた。

その一室近づき、聞き耳を立てる。

「ダメよ、私達はこの約束を守らなければならない。皆人自身が私の結界を解くか、そのまま忘却するか、どちらかでなければならぬ」

「（結界？ 話が読めないな……………）」

「彼の身が崩壊します、辞めましょう、あの人間との約束は果たしましたよね」

「でも真実を知れば彼は壊れるわ、そろそろ入ってきたらどう？」

「（気付かれた！）」

その場を離れようとする誰かの足音がした。

「（前門の虎後門の狼と言うのはこの事なのかもしれない……………」

…前門と後門？）」

「いい加減に手で来ないか！」

金髪の女性が襖を開け、出て来た、だがそこに皆人は居ない。その代わり、枕を引きずり、目元を擦る猫の様な少女が居た。

「藍しやま……………」

「橙？ 如何したの眠れないの？」

コクリと頷く女の子、女性はそのままその場を離れて行った。

「（ふっふっふっ、前後を挟まれても上が在るのだよ上が……………」

…）」皆人は忍者の様に天井に張り付き、手足を震わせていた。

「（ああ、低空飛行もままならないと危険だな……………）」

その場にゆっくり足を下ろし、素早く自分の寢床へと戻った。まったく、冒険心だけはある様ね」

ひとり呟く紫、ただ誰もそれを聞く物は居ない。

部屋の襖を閉じようと立ちあがり、襖の元へ立つ。

「ん？ こんな所に花卉が……………」

紫が手に持ったのは赤い花卉、紫はそれを見つめ呟く。

「眠っ……………」
花弁を投げ捨て、襖を閉める紫、花弁は廊下に落ちる前に灰となり飛んで行った。

25・完全な忘却（後書き）

主「映画はアメリカ、アニメは日本、ドラマがどの国が誇れるのだろっ？」

26 - 花卉の主

十二月二二日、クリスマスの宴会に全員が躍起になっていた、だが俺は違った。

八雲邸でゆつくりと休息を取っていたのだが、実に不愉快だった。何もできず、周りが必死になって準備をしていると言うのに自分は何も出来なかった。だから紫さんに「仕事をくれ」と言うとな彼女は「ならお酒を買ってきなさい」と言っただけ俺を外に出してくれた。

現在、紫さんの式の式である橙ちゃんと共に里に下りて来たのだが。「迷った……………」

実に情けない話である、別に方向感覚が狂ったわけではない、それほど魔法の森は厄介だった。

橙ちゃん曰く、「この森を流れてる川を下れば迷わないし、近道だよ」と、その少女の安易な提案に乗ってしまった自分も自分なのだが、森には瘴気が漂い、太い木の枝を猿の様に移動していたら橙ちゃんと逸れてしまった。

「橙ちゃんああん、返事してくれええええええええええ」

森は広い、声も木々や枝が邪魔をして遠くには響かない。

「参ったな……………」

日が沈む前に帰らなければ紫さんや藍さんに迷惑を掛けてしまう。木々を飛び移りながら探す、一本の木に嫌な物を見てしまった。巨大な獣が切り裂いた樹木、辺り一帯の木々も薙ぎ倒されていた。

同時刻、守矢神社。

「あやや、清く正しく射命丸文です。宴会の準備捗ってますか？」

「冷やかしだけなら帰りな、おや？ 今日人の事は一緒じゃないのかい？」

ダンボールをの山を運び出す神奈子が皆人の存在に気付く。

「ええ、ちよつと頭の頭痛を訴え、現在療養中です」

文は苦笑しながら答えると奥で早苗が手招きをする。

「文さん、実は前日紫さんが訪ねて来て……………」

喉元に刃物でも構えている様な緊迫した空気が再び体を襲った。

視界に捉えるのは橙ちゃんだがその威圧感は暴走チルノの倍だと悟った。

眼が赤く染まり、口から瘴気を溢している、簡易な表現をすれば化物の一言で片づけられる、だがその化物を超える存在だとすれば如何だろうか、ここに着くまでに木々が薙ぎ倒されていたのは彼女の足跡、つまり彼女の無意識な行動だとすれば如何だろうか。

目の前で森の一部を消し飛ばした弾幕を目の当たりにした時、薙ぎ倒された木はただ彼女が通った痕跡、『足跡』だとすれば今の弾幕は彼女の『爪痕』なのだろうか。

体が震え、狂ったように笑い出す。

彼女の体から作られる『瘴気』は『狂気』へと変わり、彼女の精神を蝕んでいる。

そう考えれば彼女を救う為に体が動くだろう。

だが体は一步たりとも動きはせず、ただ怯え、震えている。

物体が消滅するほどの弾幕、そんな物を浴びせられたら確実に死ぬだろう。

そんな考えが四肢を封じていたのだ。

「クソッ……………怖すぎて涙出て来た」

木陰に身を隠す武器は無い、カメラも文の家、木刀は折れたから無い、持っている物はマミゾウから貰った錘だけである。

「畜生、助けてくれよ」

切ない願いは少女の耳に届いた。

「っふ……………」

口から血反吐を拭きだした。

腹部から滲み出る血液、鋭利な爪が腹部を刺した。

「ミイツケタア……………」

橙の伸びた爪が木を貫通し、腹部を抉った。

傷は深く、多量の血が漏れていた。

爪は腹から抜かれ、体が前へ倒れる。

呼吸も儘ならない今、狂った少女が一步、また一步と小さな歩幅で距離を詰めて来る。

橙は足で皆人の背中を踏みつけ、爪の伸ばした右手を高く上げる。死を覚悟した、絶望で視界が暗くなり、もう駄目だと感じた。

「紫さん、お話があるのですが……………」

八雲邸に乗り込む文、その表情は普段から見せる表情からは想像も出来ぬ憤怒の表情、紫自身は何故来たかを理解しているのに笑う様に口を開く。

「あら、如何したの？」

その一言に手足の筋肉が震えあがった。

力の入った拳は何時紫を殴りつけるか、自身でも分からなかった。「早苗さんから聞きました、貴方は早苗さんから一年前に殺された皆人さんの友人の話聞き、彼の記憶の境界を弄りましたね……………」彼が頭痛を訴えたのもその反動ゆえの事、私の推理は間違っていますか？」

「そうね、まるで見たかの様に的確、正解よ。景品は無いけど」

「いえ、大丈夫です。貴方のその減らず口さえ消し飛ばせたら！」

「あおう、紫さん居ますか？」

二人の間を割って入って来たのは第三者のうどんげだった。

文も拳に入る力を抜き、うどんげの話を聞いた。

「何かしら？」

「えっと皆人さんからの伝達で『橙、瘴気の花、暴走、死に掛け、助かった』だそうです」

文は言葉の意味をいち早く理解し、うどんげの両肩を掴み、凄い形相で話しかける。

「何処ですか！？ 皆人さんは何処に居るんですか！？」

「え、永遠亭で寝かせてます！」

それを聞き終えると幻想郷最速の速さで大空を飛んで行った。

「如何いう意味か説明してくれる？」

状況の理解出来ない紫がうどんげに問い詰める。

「えっと、瘴気の花つて言う寄生すると厄介な花に橙ちゃんが寄生され暴走して、皆人さんが瀕死の状況で藍さんに運ばれて来て、何とか手術して助かったんですが……………」

「来なさい！」

うどんげの耳を掴み、スキマを通り、一気に永遠亭へと到着した。
「皆人！」

紫の目の前で揺れる金色の九本の尻尾、自分の式の藍の物だと確信したが、彼女は何かを掴み、ブラシで撫でていた。

「紫様？」

「ゆ、紫さん！」

藍の目の前にいたのは銀色の一本の尻尾を生やした人型の妖怪らしき者だった。

「藍、皆人は！？」

必死な紫に対し、藍は答えづらそうな顔をしていた。

「えっと、その、彼ならここに……………」

藍が尻尾をブラッシングする人物を指す、銀色の毛並みの妖怪らしき者、髪の色も銀髪で黒髪、人間の皆人とは全く持って違う。

「藍、冗談は後にして」

「あの、紫さん？」

紫を呼ぶ声、彼女はその声の主を知っている。

だが外の器が人間ではなく妖怪、尻尾を撫でられているのが皆人とは考えられなかった。

だが銀髪のそれは皆人だった。

26 花卉の主（後書き）

主「脱人間」

27 - 人妖の決心

永遠亭の空き部屋に紫、藍、文、永琳、うどんげ、皆人の六人が集う。

「それで、この状況を誰が説明してくれるの？」

少し不機嫌そうな紫がため息交じりの面倒臭そうな声を漏らす。

「紫様、私から説明します」

返答したのは藍だった。

「私は轟音が響く魔法の森に様子を見に行くと式の剥がれた橙と瀕死の皆人が倒れていました。急いで彼と橙を永遠亭に運び、治療を受けさせましたが、彼の方は出血が多く、残念ながら最終手段を使わせて貰いました」

「それが彼の人妖化って事？ 大方人間の血の代用に藍の妖怪の血を混ぜたって所かしら？」

藍は静かに頷く、重々しい空気を裂いたのは皆人だった。

「俺は腹を刺された後は記憶が曖昧で分からないんだけど、眼が覚めたらここで寝てて、髪の色と尻尾と耳の事でかなり驚いたよ」

頭を掻くと姿を現す二つの耳、人間の耳も健在だが、耳が四つあると頭に入る情報量が増え、頭が変になりそうだった。

「そしたら文が障子突っ切って入って来て、第一声が……………」

「モフらせてください」

「嫌あああああああああああ！」

文が瞬時に皆人の背後に回り込み、右往左往する尻尾を力強く握りしめ、顔を埋めたり、頬を擦ったりしていた。

「尻尾には…………… 感覚があつて、触られると、危険な方向で気持ち良すぎて……………」

「要は性感帯って事ね、ブラッシングの事は毛が乱れたのを気に掛けた藍がした事だと思うけど……………」

「このフワフワとした尻尾、柔らかい手触り、頬を撫でる筆の様な

柔らかさ……………枕にしたらどれ程気持ちのいい事か！」

「藍さん、止めて、この馬鹿になっちまった記者を……………」

藍が止めに入り、絶頂間際の皆人が涎を垂れ流し倒れる。

「ああ、何か人間だった頃が懐かしい……………」

涙を流し、あの頃を懐かしむ老人の様な発言だった。

「私の独断で私の血を使い、貴方を人妖にした事、私は悔やんでる。人間を辞めて辛いだろう？」

藍が深く頭を下げる、だが皆人は普段の陽気な顔で答えた。

「いや別に？」

全員が呆気に取られた。

「銀髪も尻尾も耳も気に入ったし、別に謝って貰う事は無い、逆に感謝してる助けてくれた事に、まあ文が怖いけど……………」

「だが……………」

「それじゃあ尻尾の手入れに付いて教えてくれないか？　こう言うのは先人が教えてくれるのが嬉しいんだけど」

「ああ、それで良いのなら」

話し合いはこれで解決した、念の為にもう暫くは八雲邸で生活する事になるらしい。

文が舌打ちをしていたのは『尻尾に早く触れない』とかそういう理由で無い事を祈るばかりであった。

八雲邸、飯の皆人の一室。

「良かったの？」

襖を挟み、紫さんの声が部屋に響く。

「何が？　紫さん」

「実は自分自身でもかなり悔やんでいるのでしょ？」

「あ、バレました？」

「モロバレ、てか藍自体も気付いてるわよ。てか誰が倒したのかしらね橙を……………」

皆人の人妖化の一件は収まったが、まだ回収できてない謎があった。

今現在、『寝ている橙を誰が倒したのか』が問題であった。自身の弱点に対し抵抗しないと言う事は可笑しい。

橙は誰かと戦い、藍の来る数分で疲れた所に水を被せた。

誰かが助けたとしても、妖怪の森には魔法使いが二人居るが水は使えない、それも相手は素早く、当てる事より、攻撃を避ける事すら容易ではない。

「もしかしたら、俺が覚醒とかして倒したとか？」

「無い」

「全否定ですか……………」

「でも、幻想郷で水を使えるのは少ないし誰もが弱小だったり、森から遠い、考えられる線は……………」

「能弾って名前に覚えがありますか？」

唐突に皆人は話を変えた、未だに謎の多い人物の名である。

紫は一瞬取り乱し、頷いた。

「やっぱ知ってるんですね。紫さんが俺の頭に何かしらの細工をしたのは分かってます」

「そう。それで能弾と言う人物と今回の一件、何の関わりが？」

「アイツ、魔法使いに憧れてるんですよ」

「それで？」

「アイツはガキの頃に言ったんです『魔法使いになるまでは死ねない、せめて空を飛ぶだけで』

「良いから』って、アイツは生きてます」

「そんな筈無いわ、彼は死んだ」

「いいえ、死んでません。ただ身を潜めているだけです、俺達を驚かせようと」

下の名前は今も思い出せない、だが顔や性格、過去の思い出が山の湧き水の様に少しずつ戻る。

「一年前、俺はバイトから帰って自分の今の生活を愚痴ってました、

『ああ、もつと儲かるバイトないかな、アイツさえ居なければ少しはらくなのにな』って、それがきつかけだったのかもしれませんが。その次の日にアイツは居なくなりました。最初は心配してましたが、日に日にその心配は喜びに変わりました。今は後悔してます」

「もしも彼が生きてて会ったら何が言いたい？」

「わるかった、本当にすまないって言いたいですね」

二人して小声で笑う、足を縛る枷は外れ、まるで二人は子供の様に無邪気に笑った。

「でもまあ、再び皆の前に立つには少し無理っぽいですがね」

「あら、如何して？」

「やっぱり銀髪で尻尾と耳を生やして皆の前に出たら『お前誰？』って言われそうで」

27 - 人妖の決心（後書き）

主「絶賛、文暴走中」

28 - 人妖（前書き）

活動報告に大切な事が書いています。

28-人妖

誰も居ない暗闇の空間、目の前にある目玉だらけの謎の錠、そして手に握るレンタルビデオの会員証、またもこの空間へと迷い込んでいた。

「（仮説だがこの空間は俺の記憶の深部、あの馬鹿の記憶もここに閉じ込められている。俺がこの世界で一分活動すると外では俺は一時間寝た事になってる、そう思えば最大活動限界は七分……………短っ！）」

そう思いつつも錠に一度触れ、右手で渾身の一撃を錠に放つ。人妖になった事で筋力も増え、弾幕も未熟ながらも撃てるようになった。

だと言うのに錠はビクともしない。

「紫さんはゆっくりして冬眠してるし、頼むのも悪い、なら全力で破壊するしかないか」

手の骨を鳴らし終わると、右手で錠に触れ、肩幅程度に足を開き、右脚と左腕を後方へ引く。

「はいんっ！」

再び風を切り、錠へ衝撃を与える右腕、棍棒の様な鈍い打撃音が

「ここまでか……」

急に襲い掛かる睡魔と痛くは無いが赤く腫れる拳を押さえる皆人、意識が遠くなるのを感じると聴覚が自分を呼ぶ声を耳に入れた。

「起おおおきいいいてえええええええ！」

目の前に揺ら揺らと揺れる細長い猫の尻尾、体を激しく揺らされる感覚、何故か尻尾に感じる快感。

早朝、冬の朝は布団が恋しくなる。

それは当たらずも遠からず、自分の場合は体を動かせる職が恋しい。

「橙ちゃん、おはよう。そして何故尻尾に抱きついてるのかな？」

「紫しゃまが『中々起きなかつたら尻尾を触れ』って……………」

冬眠から眼が覚めたらとりあえず『あれ、老けました？』と言ってやろう。

早朝午前五時、これでも八雲一家の朝では早いらしい。

何故そんな時間帯に起こされたのかと言うと。

「それじゃあ最初は軽く、力は全然要らないから」

「はい」

人間を辞め、半人半妖と化した俺の毛繕いの講義である。

藍さんは忙しく、早朝と夜の二回に分けて教えて貰っている。

立派な妖怪になる為には身の整えは初歩の初歩らしいが人間が名残惜しい自分には関係は無い。

だが手入れの行き通って無い尻尾は相手に対しても失礼らしい。

妖怪業界は大変である。

「そうそう、先からゆっくり、根元まで」

「何か変な感覚です。手でも足でも首でもない物がある、何か違和感の塊ですね」

「人間が恋しいか？」

「悔いがありますが、人妖として早く立派になりたいと言う欲も在るのが現状です」

二人で雑談しながら手入れをしていく。一人、どちらかと言うと一匹が自身の尻尾を揺ら揺らと揺らしてこちらを見ている。

彼女の様子からコマンドを作るのであれば『橙が尻尾を触りたそうに見ている』、勿論、『いいえ』を十六連打。

「橙ちゃん、おいで」

その一言を合図に橙ちゃんが飛びかかる！

だが残念、素早く攻撃を避け、橙に膝枕をする。

「顎下ゴロゴロ」

「にゃーん……………」

橙ちゃんの顎下を五本の指が優しく愛撫する。

撫でられれば撫でられるほどに抵抗が少なくなる橙、撫でれば撫でるほどにほっこりと笑顔になる。

「コホン、橙、あっちに行つてなさい」

「えー」

「えー」

何故かすっかりと童心に戻った皆人が橙の言葉を真似して口にする。

「はああつ、仕方ない。私は朝食の支度でもするよ」

「えつ、ああ自分も手伝いま……………」

「皆人、御前はまず尻尾の磨き方を心得てからだ。それまでは働く事も許さん」

そう言つて部屋を出て行つてしまふ藍の背中を見送ると橙を離し、二人で尻尾のブラッシングについて話し合った。

「藍さん、これで如何ですか？」

尻尾を磨く事三十分、磨き終わつた尻尾は綿菓子のように膨らみ、毛布より心地が良かった。

「おお、綺麗に出来てるじゃないか」

「橙ちゃんの指導の元、何とか無事終わらせました」

実際は橙は磨いた尻尾を触り、藍の尻尾の柔らかさに近いかどうかを計測して貰っているだけである。

「こつちも朝食の準備が終わつた所だ、食べよう」

「はい」

机の上には味噌汁、白米、沢庵と質素な物が揃っていた。臭いに釣られて橙が座り、食卓に三人が集まつた。

「それでは頂きます」

藍さんが言い終わると皆人が手を会わせ続く。

「頂きます」

無尽蔵な元気からあふれ出す輝かしい笑顔で橙が続く。

「頂きまーす！」

三人ともそれぞれ手を初手に手に取った物は三人とも別々だった。

藍は味噌汁、橙は沢庵、皆人は白米を各々の口へ運ぶ。

白米は甘かった。

白米本来の甘みが強く、噛めば噛むほどにほんのりとした甘みが口に広がる。

たぶん釜で作った物だからだと思うがコメントは控えた。

自分は別にグルメリポーターでもなければテレビに出ているわけではない。

馬鹿が付くほどの愚直に普通すぎるほどストレートに一言。

「美味しいですね」

「ああ、そう言って貰えると嬉しいよ」

味噌汁を飲む藍が微笑み返す。

愉快的朝食が時間と共に過ぎて行つた。

働けない気晴らしに妖怪の山へ釣りに来た、白狼天狗は俺を誰か分からなかったが事情を離すと何故か大群に囲まれ、尻尾を触って行つた。

何故か橙ちゃんも着いて来たが現在は尻尾を抱き枕にゆつくりと寝ていた。

自分も心置きなく川釣りを楽しめる、ハズだったのだが。

幻想郷屈指の情報通へと情報が流れてしまった。

「あやや！ 何処ですか、皆人さん！ 悪い様にはしないから出て来てください！」

「すいません、ラスボスは仕事の同僚でした……………」

木陰に身を潜め、ガクガクブルブルと体が震える。

彼女の二つ名は『幻想郷最強』、その名の通り、幻想郷で鴉天狗より速い物は光か色恋話くらいと言われるほどである。

見つければ死、道具は釣り竿と餌のミミズ、そして橙ちゃん。

「あれ、ダイハードよりもハードじゃね!？」

所謂詰みゲーである、テトリスとか思った人は町内を年の数走るかマンスヨンの階段を自分の部屋の番号の回数上り下りしなさい。

「橙ちゃん、ぐっすり寝てるなあ、てか置いてお兄ちゃんと戦って

.....」

匍匐前進で進んでいると地面に雪の塊を見つける。

白狼天狗が掃除し、木の元へ集めた物だが、上を向くと木には多少雪が残っていた。

その雪が運悪く、木から落ちて来る。

量は少ない、だが落下地点には皆人本人も気付いてない物が在る。尻尾をぐっすり抱いて寝ている橙、その少女の顔に無慈悲にも雪が落下した。

「にゃあああああああああああああ!」

「ぎゃあああああああああ!」

橙が驚き、皆人の尻尾に力強く抱きつく。

それに驚き、皆人が悲鳴を上げる。

地獄耳を持つ鴉天狗が皆人の声を聞き付け飛んでくる。

そして鴉天狗が俺の背後へと立った。

「見つけましたよ、そのフカフカな、はあ、尻尾に、はあ、私が、はあはあ、頬ずりを!」

簡単に絵図を説明しよう、倒れる皆人と息を荒らげ襲いかかろうとしてる文、如何見ても被害者と変態の構図であった。

「ふっへっへっ、大丈夫、最初は痛いかもしれないけど、段々気持ち良くなるから」

変態だ、変態が現れた。そう心の中で叫ぶ皆人である。

28 - 人妖（後書き）

主「主コメはしばらくありません、すいません」

29 - 初めての杯

守矢神社の境内。

ただ一人で雪を掻き分ける巫女が居た。

「はあゝ冷え込みますね」

早苗は炬燵に入り出てこれなくなった自堕落な神二人の代わりに境内の雪をかき集める。

本堂へと続く道で誰かが足を取られ、怪我をしない為である。

彼女は手袋を付け、スコップ片手に作業をしていたがまったく進行していない。

どうせ明日も雪ならやらなくても良い、そう悪魔が彼女の耳元で囁いている。

「クリスマス会の宴会の準備、年末の御守作りと大掃除、他にも色々……………」

早苗自体も既に限界寸前、猫の手も借りたい状態だった。

「ジュワッ！」

謎の奇声と共に森から飛び足してきた銀色の人影、だが鮮やかな銀色の尻尾と獣らしい耳を持っている事から察し、人間ではないと思ひ、スコップを構える。

「助けて早苗さん！」

相手の第二声に自分の名前が出てきた事に驚き、スコップを下ろす。

「えつと掻い摘んで説明すると俺、皆人、文、暴走、助けて！」

その謎の暗号に惑わされたが皆人の背後に現れる黒い影、皆人も影の放つ謎のオーラにいち早く気付き、前方へ飛んだ。

「触らしてくださいよお、私と皆人さんの仲じゃありませんかあ」

ゆらりゆらりと体を振り、距離を縮めて来る文、彼女は何かに取り憑かれたかの様だった。

「早苗さん、もう貴方しか頼れる人が居ない、だから助けて！」

「そうは行かない！ 竜巻『天孫降臨の道しるべ』！」
「きゃあ！」

一瞬にして辺り一面の積雪と早苗が竜巻により吹き飛ばされ、文が再び近づいて来る。

「邪魔者は居なくなりました、さあ尻尾をモフつと一発！」

尻尾と背中に背負っている橙と共に背後へ後ずさる、だが相手は幻想郷一の速さを誇る鴉天狗、もしも都合良くバイクが落ちていたって勝ち目はない。

万策尽き、諦めかけていた皆人へ奇跡は起きた。

文の居る場所だけ大きな影が出来る、皆人が視線を文の真上へと向けると日の光を覆う物体が見えた。

真つ白な雪崩、それは文の頭の真上から雨の様に降り注いだ。

地鳴りと積もった雪を見て呆けている皆人、その後に早苗が落ちて来る、だが雪のクッションは早苗の体を傷つける事は無く、早苗を助けた。

これも神の奇跡なのかと思い、早苗の元へ駆けよる皆人、雪山を上り意識を失くした早苗と謎の腕の本体を引き上げ、守矢神社本堂へと駆けて行った。

視界が白く覆われた世界、何が何だか分からず文は目蓋を開ける。
「あやや？ 暖かい……………」

「やっと目覚めたか、狂戦士の魂でも宿してたのかは知らんが、尻尾を見ると壊れるの何とかしてくれ、怖くて帰れない」

「皆人さん、ぷりーずたっちゅー」

「ノー」

ちつと舌打ちをする文、皆人は何時もの文だと苦笑した。

「そう言えばここどこですか？」

「自分の格好を見てみる」

そう言っただけで自分の格好を見る、直に顔を赤面させた。

体は湯船に浸かり、パスタオル一枚と言う薄い布が彼女の胴や腰辺りを隠している。

簡単に言えばパスタオル一枚で皆人の前に居ると言う事だ。

「あややややややややややややややや！？」

「俺が剥いたんじゃないぞ、神奈子さんが剥いて、諏訪子さんがスツパの状態で湯船にドボンっと、その後早苗さんが二人を拳骨で寝かした後、最高の笑顔でパスタオル巻きに来たよ」

その時軽く手に血が付いていたがアレは魚料理の準備で付いた物だと自己暗示して居たのは内緒である。

「そ、そそそそ、その時貴方は何してましたか？」

お湯の湯気で白い湯気で包まれた世界の中、文は皆人が何処に居るのか必死に探していた。

「文をサルベージして、溺れない様に見張ってた」

文は皆人を探し出した、自分の隣で足だけを湯船に浸けているが鼻に丸めたティッシュを詰めていた。

「……………見ました？」

「……………ごめん」

八雲家の食卓、だが普段と違い並ぶのは豪華な品ばかりだった。

藍の好物である油揚げで作った稲荷寿司、大量に並ぶしゃぶしゃぶ用の肉、そして豪華なお酒、本来喜ぶはずだが誰ひとりとして歓喜の声を上げない。

「良い匂い、こんな豪華料理如何したの？」

「あ、紫様」

良い匂いに釣られた熊が冬眠から眼を覚まし、食卓の前へと現れる。

「あの、紫さん」

「皆人……………如何したのその紅葉」

紫が気遣うのは皆人の右頬に真っ赤になっている手の後、皆人は

遠い眼で肉を持っていた。

「今日ぐらいはお酌してくれませんか、この里の皆さんから氣遣って貰った食材を摘みに」

酒瓶と杯を持って笑う皆人、彼は今日の日記に『初めての酒は何と言つか塩の味がした』と理不尽に叩かれた頬を撫でてそう書いていた。

30 - 聖夜前日

守矢神社で行われる二日連続のクリスマスパーティー、一日目は天狗が屋台を開いて里の人間との交流を深める物だそう。

実際は新聞とかそういう利益目的だろう。

二日目は夜行われる、酒飲みのパーティーで沢山の人物が来るらしい。

皆人はその両者とも出る、橙ちゃんと藍さんを連れて行くのだが、実際の所とも行き辛い、前日の傷がまだ癒えていない。

「鬱だ」

「そう愚痴を漏らすな」

「そうだよ、一緒にお風呂に居ただけなんですよ」

「それが問題なんだ橙ちゃん」

橙は如何いう事なのか理解できていない、もう後十年もすれば分かるだろう。

「はあ……………鬱だ」

「はあ……………死にたい」

「文、さっきからそればっか、二十回目よ」

憂鬱な文と慰めているはたてが並び、守矢神社へと向かっていた。「だって皆人さんの頬を叩いて『大嫌い』何て捨て台詞吐いたら死にたくもありません」

こちらにも鬱のオーラを身に纏い、遠い眼で何処かを見ている

「『恋する鴉天狗、その関係に罅！？』って記事書いてあげましようか？」

「ひ、罅！？」

本来の文なら適当に笑って誤魔化すだろう、だがその一言が耳に入ると肩をどつと落とし、猫背で歩いて行く。

「ああ、こりゃ重症だわ」

「「あつ」」

鬱な二人が偶々守矢神社の前で出会った、途端に二人とも体を硬直させ動かなくなる。

それを見た藍とはたてが互いの背中を押した。

「ちょ、藍さん!？」

「私は橙と屋台を回る、合流はしなくていい、気が済むまで遊べば良いよ」

「は、はたて!」

「私はスクープを探すわ、アンタと一緒に居て同じ記事書いたら癪だし、さっさと助手連れて行ってきなさい」

そう言っつて三人は文と皆人と別れ行っつてしまい、残された二人は気まずい雰囲気にも包まれる。

「とりあえず、店でも回るか」

「あ、はい」

祭は色々な見世物がある、数分も歩いていけば直に忘れられるだろうと安易に思っていたのが失敗だった。

「あ、あはは、何か静かなトコに来ちゃったな」

祭りには妖怪や人間が山ほど居る、だから別にカップルが居ても可笑しくは無い。

そんなカップル達が集まり、個人個人でイチャついている気まずい非カップル禁制の地へと足を運んでしまった。

東西南北どちらにもイチャつくカップルの壁、警官隊に包囲された犯人の様な気分である。

「あやや、とりあえず脱出しますか」

文が人混みを掻き分けようとするが荒波に押し返されてしまう。

動く事も出来ず、ただ二人でじっとしていた。

沈黙する二人だけの空間、それを打ち壊したのは文だった。

「その、ですね。前日はすみませんでした」

「いや、文が悪いってわけじゃ。元凶は早苗さんが退治してくれたし」

「いえ、どちらかと言うと私が悪いんです。気を取り乱し、貴方に暴言を吐いたんですから」

どんどんと声の音量が下がって行く文を皆人は笑って言った。

「慣れてるから気にしないで良い。それに俺は嬉しい」

「……………Mですか？」

「断じて違う。……………俺は文と仲良くなれて嬉しいんだ。友人なら喧嘩の一つはしないと、喧嘩して仲直り、これぞ本当の友人関係」

「……………友人じゃなくても良いんですけどね」

「ん？ 何か言った？」

「いえ、何でもありません。もしも貴方が罪の意識を感じているのであれば『赤くて宝石の様な甘いもの』をください」

小声で何か呟いた文は遠まわしな林檎飴の要求をした、皆人は有無も言えず、どんどんと色々な物を買わされて行った。

その後、色々と文に買わされ、財布が底を尽きかけた時だった。

「皆人さん、お話があります」

背後から自分を呼ぶ声、それは普段の格好にマフラーを巻いた早苗であった。

「ん？ 如何したんだ、そんな畏まって」

急に早苗は顔を真っ赤にした。

早苗は大きく深呼吸するが、どんどんと呼吸が荒くなり、仕舞いには顔から熱気を放っていた。

「す、すすす、好きです！ 私をクリスマスに貰ってくれませんか」
色々と飛んでいて非常識なセリフであったが、それは紛れもない

愛の告白であった。

30・聖夜前日（後書き）

主「ジングルベル、ジングルベル神が言う、リア充殺せと神が言う。

殺せ、探せ血祭りだ。性なる夜は廃止デス」

皆「主が……………壊れた」

31 - 聖なる夜 前編

クリスマス、テロリストの皆さんがビル又は空港を襲っているだろう聖夜の朝、男は人生最大の窮地に立たされていた。

何時建設したか分からない告白フラグに皆人自身は何と返事をすればいいのかわからなかった。

告白経験が豊富なイケてるメンズならまだしも、半妖で銀狐でアルバイターで美術で一を取った男が美人と付き合うなど、もしも神が許してももう片方の神と早苗さんファンの皆様と戦うのは間違いない。

と言うか返事まで決まっていけないのである。

「で？ 如何すれば良いと思う？ って文、如何した体がワナワナしてるぞ」

この男は馬鹿である。

神は言っている、「一夫多妻でも構わな……」「諏訪子様？」
嫌あああああああああ！

「何か耳元で変な声が聞こえたんだが……」

「み、皆人さん！」

「ん、如何した？」

「好きです！ 付き合ってください！」

「って訳で色々困っているんだが、助けてにとり、桜！」

「皆人さん、頑張ってください」

「頑張るんだぞお」

「と言う訳なんだけど、師匠的には如何すればいいと思う？」

「儂から励ましの言葉でも貰えると思うたか？」

「えっ！　じゃあ告白ですか？」

「戯け！　狐になると知能が下がるのか？　まあ、狐が狸の弟子、中々愉快じゃよ」

「と言うか如何すれば良いでしょうかマミさん」

「その言い方は止めてほしいのう」

「て事で！　ここは天狐である藍さんに聞きたいんだけど、如何すれば良い？」

「私も恋愛経験があるとは言っていないんだか」

最後の頼みはやっぱり藍さんだった、本人も関係ないのに何だかんだ言つて聞いてくれる良い人だ。

「さてと、状況を整理するが、文と早苗は皆人に告白した。皆人は如何すればいいのか分からないと」

「その通りです」

「片方を選ぶ」

「無理です！」

ハッキリと言いきった皆人だが別に男らしくも何ともなく、周りからは残念な男として見えている。

「なら二人と一緒に居てどちらが幸せになれると思う？」

「でも片方は幸せになれない、それがちよつと嫌かな……………」

「ならば如何する……………」

「仕方がない、こうなつたらとっておきを使うしかないな」

妖怪の山の白雪の降り続く守矢神社。

「そうです、諏訪子様の言う様にわ、私が押し倒せば……………」

「あやや、もしもフラれたら如何しよう……………うう、多分死んじやうかも」

「へっ？」

「あやや？」

「とっておき？」

出された白い湯飲みを机に置き、皆人は左手をグッと引き締め、藍に指を指し言った。

「その名も『今のままで十分じゃないか？』正攻法！」

「ダメだ」

指した指を握られ、そのまま指の関節が普段絶対に動かない方向へ折り曲げられた。

「あたたたたたたた！ 何で！？」

「皆人、お前は私の弟の様な存在だ、血は多少流れているからな。お前には幸せになって欲しい」

「藍さん、ありがとう。で、そろそろ指が死に掛けてるんだけど」

「まあ、自分で答えを見つけるんだな」

そう言い、優しい微笑みを掛けた少女に顔は少し寂しげであった。

藍に背中を押され、途方に暮れて飛んでいた時だった。

「ちよって、アレ何とかしなさいよ！」

「無理」

守矢神社に行くとは何故か激戦区だった。

はたてと皆人が守矢神社上空で爆音と爆風が起こった、何事かと思いついてみれば、悩みの種であり、片思いの少女二人の修羅場が繰り広げられていた。

「岐符『サルタクロス』！」

「秘術『グレイソーマタージ』！」

「とりあえず今年は厄年だな」

「良かったわね、今年は後六日程度で終わるわよ」

32 - 聖なる夜 後篇

十人十色、作者が好きな言葉の一つである。

十人居れば顔や思考、性格が異なる事を言う。

皆人はその十人の中で特別不思議な性格をしていた。

『恋』と言う物に実感が持てないのだ。

必死に生きる為、不要な物は全て置いて来た、恋やファッションなどの物が例として挙げられる、だが趣味と下心は男の性なので捨てられなかった。

五人の友人と馬鹿をして暮らせば良い、そうすれば寂しくない、恋人なんて要らない。

心の本当に通じ合う友人と共にいれば何も悲しくない、そう思い続けていた。

だから皆人は恋と言う物が理解出来なかった。

「可哀想だねえ」

「そう思うなら何とかしてくれよ」

皆人は河童の工房へと来ていた。

それは無縁塚で拾った液晶テレビを直していたからだ。

「それで？ ブン屋と巫女は如何したんだい？」

「ああ、とりあえず宥めたよ、原因が何かまでは本人達は語らなかつたけど理解はしてる」

「可哀想だねえ」

「そのセリフは二三回目だよ、にとりさん」

にとりは冬だと言うのに動きやすいタンクトップ一枚だけの姿で修理をしていた。

タンクトップは油や煤で灰色へと変色している。

「これで直ったよ、と言うか、こんな最先端な機器が幻想入りして

居たなんてね」

液晶テレビは地デジを対応しており、製造元も今も元気に営業している所だった。

「まあ、次々と新しい物が出て来るからね、襖は新しいのに取り帰るのと同じだよ」

液晶テレビを片手で担ぎ、外へと出て行く。

「盟友」

「何だ？」

「ほれえ」

にとりは何かを投げた、それを皆人は開いているもう一方の手で掴む。

緑色の長い野菜、河童の好物のキュウリであった。

「頑張れよお」

「あんがと」

キュウリに噛り付き、手を振って外へと飛び出す皆人をにとりは工具を指と指の間に挟んだ手を振った。

「あーあ、行っちゃった。盟友は恋人と一緒に寂しくなくなるんだね」

にとりが懷から取り出したのは古いペンダント、そこには一人の少女の写真が映っていた。

「私も盟友の旦那みたいな良い男、探したいな」

八雲邸、紫が本格的な冬眠に入り、八雲家は静寂に包まれていた。

「ただいま、橙ちゃんちよつと来て」

「はい」

家の奥から元気な声が響く、橙が宙返りしながら飛んでくるのを片手で受け止める。

「うわっ大きなテレビだ！」

橙は自分の体と同じくらいのテレビに眼を光らせる、皆人は微笑

ましくなる。

「とりあえず居間に運ぶからちよつと離れてて」

皆人はテレビを担ぎ、居間へと移動する、橙は相変わらず銀色の尻尾から離れようとはしなかった。

「この配線で……………如何だ！」

皆人はテレビのリモコンの電源ボタンを押すが反応は無い。

「あ、電池入れ忘れてた」

リモコンの裏の蓋を外すと二つ電池を入れる窪みに何も入っていないかった。

電池を入れ、再び電源ボタンを押すと液晶に絵が映った。

『私の魚雷ドリルは天を突くドリルです！ 魚雷・ドリル・ブレ…

……………』

ポチッと皆人がチャンネルを帰る。

「電波繋がるとは、指すが地デジ！」

『機動戦士ヒソウテンソクZ！』

再びポチッと。

『お、値段異常二トリ』

再びポチッと。

『ボンソワール、マドマーゼル。そんな浮かない顔をして何かお悩み……………』

再びポチツとな。

『可愛いよ、可愛いよゆっかりんりん♪』

「てか何この幻想チャンネルって」

「と言う訳で映画鑑賞会！」

「何が、と言う訳なんですか？」

「そうです！ 二人つきりなのは分かりますが三人で見えるなんて…

…………… 非常識です！」

普段常識を語らない巫女さんが何を言っているのだろうか、と皆人は苦笑していた。

聖夜の日暮、楽しいクリスマスは修羅場へと到達していた。

「まあまあ、香霖堂で色々貰ったから見ようよ」

そう言つて何も書かれていない白いディスクを取り出す。

ダビングされた何かしらの映画だろうと霖之助が話していたので間違いはないだろう。

「それでは……………」

部屋を暗くすると丁度映画が映りだす。

『タイタニック』

「ちよつと待ち」

映画を止め、ディスクを取り出し、ペンで『タイタニック』と描き、仕舞う。

「あの、今は……………」

「いや少し怖い系の映画だよ、クリスマスはダイハードだよ、うん」
早苗さんは隣でニヤニヤしているので理解されてしまった。

「そうでしたっけ？ 確か恋愛ものだったような……………」

「そこまでの過程がちよつとね、それでは次」

『ゴースト』

「待てい！」

ディスクを取り出し、再び名前を書き、違うディスクを取り出す。

これは映画を見て二人に仲直りをして貰う作戦であり、恋愛物など見せたら皆人自身が意識しているみたいで恥ずかしいかったり、修羅場が激戦へとなるのではないかと考えていた。

『ロッキー』

「何で三回連続で恋愛物なんだ！？ 策士が居るのか？ 神の奇跡か？ 天狗の仕業か？」

リモコンを手に取ろうとすると早苗が奪い、腕に自身の腕を絡めてきた。

「あの早苗さん？」

「この後はクリスマスパーティーです、さっさと見ましょう」
「むっ……………」

対抗心を燃やした文が空いた皆人の腕へ絡む。

「そうですね、さっさと見ましょう」

ロッキーのテーマが流れ出す。

「ちよつと待つ……………ガクリ」

「中々良い映画でしたね」

「流石は映画通ですね、不覚にも射命丸トキメキましたよ」

「あはは、今の心境は？」

「「素晴らしい恋がしたい」」

作戦は見事に失敗した。

守矢神社で行われるクリスマスパーティー、早苗さんや二神がミニスカサントの衣装を着て来た事に文がネタが出来た事に喜んでいたが、その後酔った早苗さんに押し倒された。

文がその後、一・ハリツルの鬼殺しを一気飲みし、参戦した事に驚きを隠せなかった。

夜は更け、酒乱しか集まらないクリスマスパーティーは終わったのだが。

「如何してこうなった」

早苗と文に腕枕をさせられてた挙げ句、二人に抱きつかれて身動きが取れなかった。

昔の友人らが見れば、『とうとう春が来たかおめでとぅ』と血涙しながら生温かい声援を送るのは確実であろう。

「それにしても、如何しようかな……………」

皆人は天井を見上げ、考え込んでいた。

二人の告白の返信だが、如何すれば良いのか分からない。

二人は美人だ、それは紛れもない事実、だがどちらか片方だけなのは空しい。

恋愛シュミレーションゲームでも思うのだが、例えばAと言う少女を好きになればBと言う少女がこの時点で視界から居なくなる。

そのBと言う存在が可哀想なのだ、Bは良い相手と結ばれるのか、そう思うとAには手を出せなくなってしまう。

「一夫多妻、邪道だけでも皆が幸せになるにはいけないのか。一人を取って花道、二人を取って茨道、はてさて如何しましょうか」

皆人は眼を瞑り、聖夜が終わるのをゆっくりと待っていた。

聖夜も終わってしまったえば儚い幻想、この告白の答えはサンタの遅れたクリスマスと言う事で。

32 - 聖なる夜 後篇（後書き）

主「おい、武器屋はおらんかえ？」

33 - 遅刻したサンタクロース

クリスマスは儚い夢の一時であつた。

ただ楽しい、騒がしいと記憶に刻まれるが物沢山あつたが終わつてしまえば夢も同じ。

残されたのは厳しい現実だけだ。

「晴輝、どちらを選ぶの？」

冬眠していた熊より厄介な妖怪のお蔭で少女二人の恋は激戦へと化していた。

十二月二六日、クリスマスが終わり丁度半日ほどの時間が過ぎた頃だ。

彼女、八雲紫の暇つぶしに皆人は遊ばれていた。

「それで？ 貴方の答えを聞きたいのだけど？」

司会担当の紫や事の発端である文や早苗でも皆人の回答を心待ちにしていた。

複雑な心境であつた。

片方を好きになり、片方を突き飛ばす。

現実と言うのは残酷だ、だが答えを出さずに中途半端と言うのも残酷である。

現実は何時でも人の期待を容易く裏切り、叶えたりする気まぐれ物なのだ。

「俺の答えは一つです」

皆人は二人に対し、頭を下げた。

額が地面と触れようと構いなしに皆人は続ける。

「俺は二人とも好きだ！ でもこれが如何いう意味での好きなのかは分からない、だから二人の告白は断らせてもらつ」

皆人にとって精一杯の回答であつた。

選択としては一番最適で、残酷な答え。

「そうですか……………」

「ならば仕方ありませんね」

聴覚の捉える悲しげな声、それは文と早苗の二人の声だが、聴覚が今回の一件と何ら関係の無い第三者の声をも捉えた。

「皆人、幻想郷は全てを受け入れる、それはとても残酷な事よ」

「分かってます、それを理解したうえでこの答えを……」

「だから、貴方の相手は幻想郷ではないと言っているの」

イマイチ言葉の意味が理解出来なかった、まるで問題は何も解決していない様な良い方だった。

「貴方は二人に『好き』と言った、これは貴方の本心。そして貴方は二人の告白を断った、それは『どちらかを選ぶ事が出来なかった』だけであり、『どちらも選ばなかった』ではない」

「そうですが……」

「つまり、彼女達は思っている事は明確、『今選ばれなかっただけで次選ばれば良い』ってね」

「はいっ!？」

思いつきり叫び、顔を上げる、そこには既に恋する乙女二人と第三者は居らず、一人だけ部屋に残されていた。

「日本語って面白いわよね『いいです』と言う言葉に対し、肯定と否定の両方の意味を持つものだから」

彼女達は自分自身がフラれた事に対し、ポジティブな考えを持ったのだ。

今回がダメなら次を狙う、同じ得物を狙い続ける獅子の様に。

「貴方の言葉の境界を弄る事は出来るわ、でも彼女達を裏切るのはちよつとね。頑張りなさい皆人」

第三者の声は聞こえるだけで本人の姿は見えない。

だが彼女の能力なら皆人の思考に直接訴えかけること位平然とやっつてのけるであろう。

「皆人さん、年越しの準備をしましょう! 後六日で元旦です、新年早々忙しくなるので気は抜けません!」

「み、皆人さん! 年末は如何過ごしますか? よかったら守矢神

社で一緒に過ごしませんか？」

そう言つて再び部屋に入つて来る文と早苗、皆人は二人の意気揚々としている姿に有無を言ふ事が出来なかつた。

33 - 遅刻したサンタクロース（後書き）

主「もうそろそろパソコンの画面が持たなくなってきました。
2011年最後の投稿になります。」

パソコンにもあと二、三週間は頑張ってもらいたいところですが、
もしもダメなときは一時投稿がストップするかも知れません。

この小説を書き始めてまだ二ヶ月です、新作の萌えもんは2012
年の春ぐらいになるかもしれません。

まあ、自分の春は一生来ず、氷河期のままですが、

来年は一人前のラノベ小説家になるために必死に語学の勉強をして
いきたいです。

それではこころへんで、良いお年を」

34 - 自重しない年末

皆人が幻想郷に来てもすぐに一カ月経とうと言う時だった。

「あの、寒いんですが紫さん……………」

冬眠前の熊と遭遇するのは危険だ、腹を空かせ暴れ出す。

それより質が悪い、紫は眼を覚まし藍に皆人を捕獲させた。

そして彼女は言ったのだ「新年は蟹が食べたい」と。

そして八雲邸でパンツ一丁で立たされていた。

「今の時期に北海の海に素潜りして蟹を取ってこいなんて、どんだけ無謀な事だと思ってるんですか！」

自身の尻尾に抱き付き、頭の獣耳をピクピクと動かす。

「死にます！ てか無理です！」

地面に懐かしき日本の海へと行けるスキマが存在するがウエットスーツ無しで冬の海に飛び込むなど死に急ぐ人間の行為である。

「さっさと行かないと給料無しだからね」

その一言で皆人は覚悟を決め、スキマに飛び込んだ。

「あ、どれだけ取れば良いのか言うの忘れてた」

妖怪の山、守矢神社。

「新年は晴輝さんと結ばれたいなあ」

等と愚痴を溢しながら手元の作業が上の空の早苗が台所でお節料理を作っていた。

包丁が何時早苗の細い指に噛み付くか心配な神が二人背後で見守っていたが、彼女は気付かずに入参を切り刻む。

「ああ、皆人さんに会いたいなあ……………でもあの文さんは如何しよう？」

人参を花型に刻み、残った人参の残骸を集め、鍋へと放り込む。

「とりあえず、仲良くはなりたいたかな、でももしも取られたら如何

しよう？」

恋は盲目と言うが彼女には本当に何も見えておらず、何包丁で見えない何かを刻んでいた。

「手料理でアピールも良いけど、でもなあ……………」

「おーい、早苗さん？」

視界に入る皆人の顔、その顔が彼女の視界に入り、脳へと伝わった時、彼女の手が停止する。

「は、晴輝さん！？」

包丁を手から零れ落ち、足から数？離れた場所に刺さる。

「あ、ごめん、返事が無かったから」

床に刺さった包丁を抜き、水で洗う晴輝、その姿を心臓を五月蠅くさせながら見つめ続ける。

「如何してここへ？」

「ああ、実はお年玉の前払いつて奴かな？　じゃーん蟹！」

そう言つて両手に持つ蟹を見せる、蟹は足を動かし、必死に逃走を試みている。

「わぁ、蟹だ！」

早苗も眼を輝かせている、幻想郷には海が存在しないので大きめの蟹は極上の一品である。

「年始にでも食べて、いやぁ、紫さんに頼まれて北海道から直接獲つて来たんだ、その余り」

「ありがとうございます、良ければ家で食べませんか？」

「いや、文にも誘われててね、明日はダメだけど明後日ぐらいには行けるよって、何故に抱き付くのかな？」

「蟹何て豪華な物頂いたお礼です、嬉しくありませんか？」

「嬉しいんだけど、文とあちらのお父さんが怖い」

そう言つて指を指す方向には御柱に顔の半分を出して睨みつけて来る神奈子が居た。

「アレは残像です」

「残像てか実像だけど……………」

「それに文さんとは別に彼女でも何でもないので怖がる心配はありません」

皆人の胸に『の』の字を書きながら胸を押し当てる早苗、皆人は意識しない様に自分の舌を噛む。

その様子を微笑ましく見つめる諏訪子と御柱に罅が入るほど強く握りしめる神奈子が居た。

「渡る世間は神ばかりか」

天井を見上げ、何かの悟りを開く皆人、後に御柱と激闘を繰り広げた事は知らぬが華。

「文、帰ったぜ」

「あ、お帰りなさい」

皆人は現在、週五回で八雲家で働いている。

ボーダー商事に就職したのだ。

仕事は春先なのだが体が職を欲して疼いてしまう。

今の所は雑用や妖怪退治、紫の玩具として活躍している。

仕事時間は朝の六時から夕暮れまでである。

「お土産持つて帰って来たぞ、ほら蟹」

「良いですね、明日の晩にでも頂きましょう」

蟹を無造作に冷蔵庫に入れ、文は皆人へ近づく。

「あのですね、昨日の続きを……………」

「うえっ、ちよつと待て、俺は疲れてるんだが……………」

「ダメ……………ですか？」

「上目遣いは……………分かった、だけど一分だけな」

はぁっと短いため息を吐き、皆人は文にブラシを手渡した。

「それではふーんふーん」

文はブラシで皆人の白銀の尻尾を愛で始めた。

文のブラッシングは最近では日課になっている、だが文は根っからのモフモフ好き、一度ブラシを手に取り、尻尾を愛で始めると止

まらない。

「いやあ、触り心地と言いますかとても柔らかく抱き枕にしてもよ
ろしいでしょうか？」

「ダメだ、それだけは」

文に尻尾を貸せば絶対に何かするだろう、一日中尻尾を弄られて
は寝付けない。

皆人は自身の銀色の獣耳を撫でる、尻尾にも獣耳にも感覚はある、
どちらも痛覚を持っているが耳は特別だ。

その気になれば人間の心臓の音まで聞こえるほどのレーダーが耳
にある。

だが耳で得る情報量に頭が処理できなくなから余程の事が無いと
使わない。

「では皆人さんを抱き枕に……………」

「それはもつとダメだ」

「我が儘だなあ……………」

「どっちがだ！」

迫って来る年の終わりと始まりに相変わらずの二人であった。

「さてと準備できた、後は……………」

「皆人さん、準備で来ました？」

「グッドタイミングだ文、それじゃあ行きますか」

今年は守矢神社で年越しだった、二人が前日揉めた末の妥協案が
守矢神社での年越しとなった。

文も多少の不安を持っていたが自己解決したそうだなによりだ。

「今年は一カ月間が凄い濃密だったな」

「そうですね、あつという間に今年も終わる、妖怪にとっては一年
が一日の様に感じられます」

「そういえば文って軽く年齢が三、四桁何だろ？」

「ええ、でも数える事が面倒になりましたけど」

自分の年齢すら忘れるほどの長い年月、気が遠くなる様な話だが自分も人妖の為、他人事ではない皆人、皆人自身も後何百年も生きなければならぬ。

「俺が死ぬ頃には里の皆も全員知らん顔何だろうな」

「はい、妖怪と人間の時の流れは別ですから、人間の百年が私達妖怪に取っての一年です」

寿命で死ぬ事が人間の喜び、だが妖怪は如何なのだろうか、何百年も生きる妖怪の記憶は如何なるのだろうか。

この幻想郷では死ぬ事も叶わぬ不老不死と言う物が存在するらしいが彼女は生きる事に辛さを感じないのだろうか。

「皆人さん、着きましたよ」

考え事をしている間に守矢神社の鳥居の前へ立って居た。

「さてと、年越しですか」

皆人は境内を飛んで移動する、彼にとってこの年越しは何年経っても忘れる事の出来ぬ思いになった。

34 - 自重しない年末（後書き）

主「自重……………したくないな」

35 - 銀狐

上下左右、どちらを見ても黒一色の世界が意識を支配していた。若津皆人の記憶と忘却の境界と言う不思議な空間、今日も一人でその空間に一人立っている男が居た。

「ビクともしねえなこの錠は！」

自分の体長を軽く超える巨大な錠、それは忘却された友人との思い出を封じる錠だった。

「あと一分か、諦めよう」

四肢を投げだし、黒い地面に大の字で寝転がる。

上を見上げても黒い世界、そんな世界にレンタルビデオショップの会員証と皆人と錠の空しい世界。

「如何だ調子は？」

皆人の四つの耳が聞き覚えのある声を聞き取った。

「藍さん？」

錠を付けた張本人八雲紫の式の藍が錠の前へ立って居た。

「力を貸してやろうか？」

そう言う彼女は座りこむ皆人に右手を差し伸べた、皆人にはもう気力も力も残っていない。

「如何か惨めな半妖に力をお分け下さい九尾様」

皆人は言葉に冗談を混ぜながら銀髪の藍に手を取った、九尾でも無い銀色の狐の手を。

「んっ？」

眼が覚めたら守矢神社の一室で寝ていた、尻尾に文が抱き付き、早苗が皆人の腕を枕代わりに寝ていた。

「夢か、一富士二鷹三茄子って言うけど、狐は如何なんだろうか…

……………」

「明けましておめでとうございます師匠」

「おう、皆人、おめでとう」

守矢神社の裏の湖、無数に刺さる御柱の上で弾幕の師匠であるマミゾウが立って居た。

「これで七回目じゃが今回こそちゃんと撃って見せろ」

マミゾウがそう言うのと青白い人型の様な物が現れた。

マミゾウの弾幕は人型、鳥型、犬型、蛙型など色々な種類がある、その一つだ。

それを撃ち落とすのがマミゾウ式七番修行の三番目である。

一番目は『弾幕ごっこでの素早い対処』、二番目は『弾幕の避け方』三番目は『弾幕の放ち方』と色々なプログラムがある。

四番目からは『模擬戦』『スペルカード習得』『実戦』『乱戦』と色々ある。

実際では弾幕が放てないので三番目からストップしている。

「はい」

右手を前に出し、息を吐く。

弾幕は脳内でイメージした物がそのまま出て来るケースが多い、星型をイメージする魔法使いやハート形をイメージする無意識の妖怪も居る。

皆人は右手を前に突き出し、眼を閉じイメージする。

バレーボール程度の弾幕、それを手の甲で回転させる様なイメージ。

「おおっ！」

「えっ？」

マミゾウの歓声に眼を開け、右手の甲を見る。

手の甲で回転する炎の球体、それをボールの様に扱い、握りつぶすと火の粉になり消えた。

「おお出来たじゃないか」

「すげえ、出来た！　出来ましたよ師匠！」

「……………」

「如何しました、師匠？」

皆人自身も気付いた、自分の声が重く暗くなつて行くのを。
新年だと言うのに寒さを感じず、体が熱くなるのを。

自分の右腕が真つ赤な炎に包まれていることを。

「何だよ、これ……………」

禍々しい獣の左腕、夕焼け空の様な紅い炎、服は焦げず、周囲の
温度を上げて行く。

「昔見た事があるなあ……………片手に黒い手袋をしている地獄
教師の奴」

左腕は皆人の意志に反し、手の甲をマミゾウへと向ける。

手の甲から噴き出す勢いのある炎、冬の寒さを吹き飛ばす火炎は
マミゾウの居た場所を包み込む。

「師匠！」

「叫ぶな青二才」

視界の上から響くマミゾウの声。

その直後、顔面にめり込む膝とドロワーズが目が捉えた。

「そんなに騒ぐな、妖怪も中途半端な奴に負けるか」

「あやや？　皆人さんは？」

「ふえっ？」

畳の上で雑魚寝していた文と早苗が体を起こす。

「誰か、皆人さん見ませんでした？」

早苗が他に畳の上で寝ている椀やにとりが手を振って否定をする。
「そうですか、あやや！　もうこんな時間、私は新聞配って来ます
ね、ジュワ！」

そう言つて黒い翼を広げて飛んで行ってしまう文。

「そうですか、仕方ありませんね」

そう呑気に言っている間にも師弟の激しい戦いは続けられていた。

36 - 銀色の男

暗闇が支配する『記憶』『忘却』の境界の世界、四肢を地面からぬ黒い空間に鎖で縛られていた。

「さてと、お話しようぜ」

皆人の声は壁に当たって反響する事も無く、ただ闇の中に消えて行った。

「この拘束、簡単に外れれば苦労はしないんだけどな……………」

……

手足に力を入れ、鎖を無理やり外そうと試みるが力が持続せず、口からため息となって出て行く。

「まあ、馬鹿は馬鹿なりに足掻きますか」

その頃、皆人の体は。

「さてと、まあ手始めに紫って奴を殺すか」

殺意に満ちた鋭い瞳は倒れたマミゾウの腹部を踏みつけ、空を見上げていた。

「何時も世間じゃ狸より狐の方が人気なんだよ、テメエ程度にやられるほど狐やってねえよ」

マミゾウの腹部から足を退け、蹴り飛ばす皆人の体、その表情は舞台の上の道化師の様に笑い続けていた。

「楽しい、楽しいなあ！」

笑い続ける皆人の体の周囲に群がる白髪の少女達。

「白狼天狗って奴か、また良い玩具見つけたあ！」

「掛かれ！」

一人の合図で一斉に投げ飛ばされた。

先端に錘の着いた鎖、忍者の道具の様な鎖が手や足、腹に絡まり、皆人の四肢を縛ろうとした。

「でも残念」

その場で体を回転させ、鎖を全て巻きとった。

「もうちよい楽しませろよ、犬共！」

「皆人さんが……………妖怪に？」

「はい、現在守矢神社の後ろの湖で激闘中、皆人さん自身もまるで別人の様に……………」

椈の言葉を聞き終わるより早く、文が空を舞う方が早かった。

椈が反応できない一秒より早い世界で文は動いた。

「まったく、記事に込まない人ですね！」

数秒で守矢神社に着くが戦況は無惨な物だった。

白狼天狗の山とマミゾウが倒れており、皆人は居ない。

「これは……………」

「オイ、その鴉……………」

今にも絶えそうな虫の息で話す妖怪が居た。

「確か神霊事件の時のマミゾウさん？」

「そのとおり、気に食わんが八雲の狐じゃないと奴には勝てんぞ、弟子のくせに妙な技を使いおつて……………」

「妙な技とは？」

「ああ、イマイチ分かんが奴の炎に気を付けろ」

マミゾウはそう言うと言を閉じた。

死んだわけではない、気絶しただけ。

「皆人さん、本当に記事には困らない人ですね」

守矢神社本堂前。

「貴方は誰ですか？」

守矢一家の巫女とその後ろに神が二人待ち構えていた。
その先には四肢から炎を纏う銀狐、皆人が居た。

「いやあ、何言つてんの、俺だよ皆人だよ」

「貴方は皆人さんの皮を被った化物です、さつさとその体から離れなさい！」

「チッ、このアマもあっちの方が良いのかよ」

舌を打ち、両腕に巻いた鎖を縦に振りまわす皆人、その顔は相変わらず歪みの無い悪魔の様な笑顔。

「家の早苗には暴力的な男は似合わないからね、さつさと逝って貰うよ！」

鉄の輪を大量に取り出し構える諏訪子。

「早苗の男とは認めてないけど、アンタみたいな自分が強いと過信してる馬鹿はもっと嫌いだよ」

御柱を背中に背負い、構える神奈子。

「神と殺し合えるなんて最高だ、さつさと燃え尽きるクソが！」

「（暴言その五）」

「クソがもうここまで来やがったか」

「何一人で呟いてるんですか？」

皆人が視線を早苗に向ける。

そこに鬼が居た。

青色の鬼。

妖怪の分類ではない言葉の方の鬼。

目を赤く輝かせ、立つ巫女。

守矢の二神も恐怖で足が震えている。

「尻に敷かれてんなあ、神様の馬鹿は……………」

「秘法『九字刺し』！」

皆人を囲む多彩の光の線、皆人は尻尾を振りながら大きく欠伸をする。

「警告です、その体から出て行きなさい、貴方は如何見ても悪霊の類、それならこんな事をする理由があるでしょう？」

「巫女さん、それは違うぜ」

「何がです？」

「俺は悪霊じゃない。それに理由なんてねーよ。ただ殴りたいから殴る、ただ殺したいから殺す、それだけさ、てめえの内臓抉ってその神様に見せてやるよ」

地面を蹴り、空中で体を縦に回転させる。

「燃えろおおおおおおおおおおお！」

体を燃やし突撃する皆人、その回転からは八雲藍を想像させる物があつた。

だが皆人の体が早苗に触れるより早く、体に何かが衝突する。

六角形の柱に体が力負けし、後ろへ吹き飛ぶ。

「不様だね、人の子は所詮人の子か」

倒れた皆人の体に無数の御柱が降り注ぐ。

砂埃が舞い、皆人の体が隠れた。

「少しやりすぎたかな？」

地面に刺さる数本の柱、その一本が不可思議に動き出す。

風を切り、神奈子の隣を過ぎ去った柱は神社へと突撃した。

「……………」

神奈子何が起こったのか一瞬理解出来なかったが、背後の見るも無惨になった神社を見て凍結していた思考回路が鈍い音を出して動き出す。

「神社があああああああああああ！」

「神奈子おおおおおおお！」

自身の神社が崩壊した事に諏訪子も驚きを隠せない。

「一発は一発で返せつて良く言われたから返させて貰ったぜ」

砂埃を被りながら皆人が体を見せる。

「おいおい如何した神様、そんな古ぼけた神社の一つや二つで」

「古ぼけた」

「ボロ神社？」

ゆらりと立ち、体を揺らす神奈子、一部捏造して鉄の輪を地面へ落とす諏訪子。

「小僧、今何て言った」

「ボロ小屋の一つや二つ如何って事無いだろうが」

二人の怒りを煽る様に不敵に笑う皆人、神は笑いながら自身の武器を手を取った。

「神罰をくれてやる！」

「崇ってやる」

「幼女と年増風情が！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3915x/>

東方働楽録

2012年1月7日07時47分発行